

## 地獄の一季節 註解 (五)

小 田 良 彌

☆

*Encore tout enfant, j'admiraais le forçat intraitable sur qui se referme toujours le baigne; je visitais les auberges et les garnis qu'il aurait sacrés par son séjour; je voyais avec son idée le ciel bleu et le travail fleuri de la campagne; je flairais sa fatalité dans les villes. Il avait plus de force qu'un saint, plus de bon sens qu'un voyageur — et lui, lui seul! pour témoin de sa gloire et de sa raison.*

まだ小さな子供の頃、徒刑囚の監獄に閉ぢ籠められる強情無頼の囚人に、俺は眼を見張つたものだ。俺は、その男の滞在によつて祝聖されたやうに思はれた数々の宿屋や、貸間を訪れた。その男の思想をもつて、青空を眺め、野良に花さく労働を眺めた。彼の宿命を方々の街に嗅いだ。彼は聖者を凌ぐ力を持ち、旅人も及ばぬ分別を備へてゐた、——而も、その光榮とその理智との証人としては、ただ彼だった、彼だけだったとは。

*Encore tout enfant, j'admiraais le forçat intraitable sur qui se referme toujours le baigne: —*

小さな子供の頃に眼を見張つたといふ、この forçat intraitable はおそらくはランボオが実際に目撃したものであつたらうと考へられるのみならず、この forçat intraitable はランボオ的世界の展開に極めて重要な意味をもつてゐるもののやうに考へられるのである。

ランボオの作品においては少年時の単なる追憶、甘い追憶は全然出てこないのであるが、*Une Saison en Enfer* および *Les Illuminations* において四ヶ所程少年時の追憶が語られており、その追憶がいつれも以下に示すやうに、死の世界、空の世界に関するものである。即ち死の世界、空の世界をのぞいたといふことは、いはばランボオ的世界展開の第一歩、否定行の第一歩をふみ出したことを意味するものである。かかる自己の世界のひらけそめ、あるいはその機縁に関する追憶として少年時が語られてゐるのである。そして少くともその機縁となつたものがこの

forçat intraitable であつたのではなからうかと推測されるのである。その意味におつて、これがランボオの世界の展開に極めて重要な意味を帯びてゐるのことに考へられるのである。

Cf. Enfance;

I) Cette idole, yeux noirs et crin jaune, sans parents ni cour, plus noble que la fable, mexicaine et flamande; son domaine, azur et verdure insolents, court sur des plages nommées, par des vagues sans vaisseaux, de noms férocelement grecs, slaves, celtiques.

この偶像、眼は黒く髪は黄に、親もなく、侍者もなく、物語よりも気高く、メキシコ人でありまたフラマン人。その領土は、傲岸無頼の紺碧の空と緑の野辺、船も通はぬ波濤を越えて、猛々しくもギリシヤ、スラブ、ケルトの名をもて呼ばれた浜辺から浜辺に互る。

この「Enfance; I) のこゝろは、死に soeurs de charité を求めた “Les Soeurs de Charité” の第一節

Le jeune homme dont l'oeil est brillant, la peau brune,  
Le beau corps de vingt ans qui devrait aller nu,  
Et qu'eût, le front cercle de cuivre, sous la lune  
Adoré, dans la Perse, un Génie inconnu,

その若者、眸は輝き、皮膚は褐色、  
裸のまままで歩いててもよい二十歳ニッソウチの見事な肉体をして、  
額カシは赤毛に縁どられ、月光の下、ヘルシヤの国で、  
或る未知の精霊を礼拝したとおぼしき若者、

に照応するものがある。

II) C'est elle, la petite morte, derrière les rosiers. — La jeune mannan trépassée descend le perron — La calèche du cousin crie sur le sable — Le petit frère — (il est aux Indes!) là, devant le couchant, sur le pré d'oeillets. — Les vieux qu'on a enterrés tout droits dans le rempart aux giroflées.

薔薇の茂みのうしろにゐるのは彼女だ、死んだ娘だ。——年若くて亡つた母親が石段を降る。——従兄の乗つた軽快な幌馬車は砂地を軋る。——(インドに住んでゐる) 弟が、——夕陽を浴びて、あそこ、石竹の花咲く草原にゐる。——埋葬された老人達は、丁字香の漂ふ砦に、すくと立ちあがる。

III) Il y a une horloge qui ne sonne pas.  
時刻を打たない時計がある。

IV) Je serais bien l'enfant abandonné sur la jetée partie à la haute mer, le petit valet suivant l'allée dont le front touche le ciel.

本當に、俺は、沖合に遙かに延びた突堤の上に乗せられた少年かも知れぬ。行く手は空にうち続く道を辿つて行く小僧かも知れぬ。

V) Qu'on me loue enfin ce tombeau, blanchi à la chaux avec les lignes du ciment en relief — très loin sous terre.  
……………

A une distance énorme au-dessus de mon salon souterrain, les maisons s'implantent, les brunes s'assemblent. La boue

est rouge ou noire. Ville monstrueuse, nuit sans fin!

終に人は、漆喰の条目の浮き出した、石灰のやうに真つ白なこの墓を、俺に貸してくれるのだ、——地の下の遙か彼方に。

……………

俺の地底のサロンの上を遙かに遠く隔って、人々の家が並び立ち、霧が立ちこめる。泥は赤く或は黒い。怪物の都会、果てしない夜。

Cf. L'Impossible, p. 67.

Ah! cette vie de mon enfance, la grande route par tous les temps, sobre surnaturellement, plus désintéressé que le meilleur des mendians, fier de n'avoir ni pays, ni amis, quelle sottise c'était. — Et je m'en aperçois seulement!

ああ、俺の少年時代のあの生活、季節もわかたず街道を行き、自然には考へられぬ程に節食して、乞食の一番上等な奴よりも更らに利慾に超然として、故郷もなく友達もないこの身を誇り、想へば愚かな事であった。——そして漸く俺もこれに気がつく。

以上いづれも死の世界、空の世界をのぞきこみ、そこにランボオ的世界がひらけそめた少年の日を追憶する言葉である。L'Impossible, p. 67のところは還相面から、さらにそれを愚行としてゐるのであるが。また

Guerre じかじや

Enfant, certains ciels ont affiné mon optique: …… Je songe à une Guerre, de droit ou de force, de logique bien imprévue. C'est aussi simple qu'une phrase musicale.

少年だった時、何処の空だか知らないが、俺の視力を磨き上げてくれた。……俺は、権利の、或は、力の、全く思ひもよらぬ理論の『戦』を夢みるのだ。

音楽の一楽節の様に埒もない。「単純だ。」

といつてゐる、眼を開いた少年時の追憶も同様のことを語るものと考え、てよいであらう。

なほ Une Saison en Enfer, p. 8 にあつて

J'ai appelé les bourreaux pour, en périssant, mordre la crosse de leur fusils. J'ai appelé les fléaux, pour m'étouffer avec le sable, la sang.

俺は死刑執行人共を呼び寄せたんだが、それは死にかけながらも、奴等の銃の台尻に咬みついてやるためだ。連枷責めの折檻を招いたが、それも血と砂とに塗れて自ら窒息するためだ。

あるいは本節において、

Je me voyais devant une foule exaspérée, en face du peloton d'exécution, pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre, et pardonnant!

俺は銃殺執行班に面と向つて、激怒した群衆の前に立ってゐたのだ、彼等には了解し得ない不幸に歎きながら、そして彼等を宥しなから。

といつてゐるところなども、この箇所に関連があるもの様に考へられる。

かくて Les Soeurs de Charité にあつて

O Mort mystérieuse, ô sœur de charité.  
 神秘的な死神、(死よ)おや、これぞまことの看護修道尼！

といふやうな世界が開かれてきたのである。これはランボオの世界の展開にとっての決定的な第一歩だといつてよいであらう。それが Une Saison en Enfer, p. 8 の “j'en ai trop pris” と “ひ” やきの L'Impossible, p. 67 の “quelle sottise c'était” といつてゐるやうに還相の立場に至るのであるが、かく否定を媒介とするといふことは決定的な第一歩である。そして死をふまへて生きるこの forçat intraitable の生はいはば死にながら生きることであり、このすぐ後で、

On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.

貴様が仮に屍体であつたとしたら、それ以上に殺さうとする奴もあるまい。

といふ言葉が出てくる所以であり、そこにこそまた無畏の世界も開かれてくる故に、かかる徒刑囚に対して forçat intraitable といふ所以があるわけである。Enfance におひつては前掲のやうに son domaine, azur et verdure insolents — その領土は、傲岸無頼の紺碧の空と緑の野辺——といつてゐる。

かかる forçat intraitable によりランボオの世界の第一歩がふみ出されたとすれば、上掲 Guerre の certains ciels ont affiné mon optique といつてゐるやうに、正に感嘆の眼を見張つたに過ぎない。jadmirais といふ所以である。

je visitais les auberges et les garnis qu'il aurait sacrés par son séjour : ———

じじのじじはじやの Mauvais Sang, p. 15 の

Je me rappelle l'histoire de la France fille aînée de l'Eglise.  
 J'aurais fait, manant, le voyage de terre sainte; .....

俺は教会の長女たるフランスの歴史を想ひ起す。俺は、賤民なりに、聖地詣の旅をしたのかも知れない。……

と対比的である。ランボオにとっては Christianisme は安住の世界ではなかつたし、フランスの歴史の中にも自己の世界を見出すことはできなかった。かかる forçat intraitable の滞在した場所こそ、ランボオにとっては正に sacrés といふにふさはしい場所であつたのであり、かかる場所こそランボオにとっては terre sainte であつたのであり、この訪問こそが真の聖地巡拝であつたのである。

je voyais avec son idée le ciel bleu et le travail fleuri de la campagne : ———

じの forçat intraitable のイデーを以て見るとは、上記のやうに死にながら生きて行くもの of イデーをもつて見ることである。

le ciel bleu はもちろん現世否定の彼方に見出される寂靜の世界、空の世界である。

Cf. Bateau ivre.

Et dès lors, je me suis baigné dans le Poème

De la Mer, infusé d'astres, et lactescent,

Dévorant les azurs verts; où, flottaison blême

Et ravié, un noyé pensif parfois descend;

Où, teignant tout à coup les bleuités, ……

この日より、星の光に注がれて、乳色に光り輝き、  
碧瑠璃の空を啖ひて、大海の詩のただ中に  
涵りたり。その大海に、流れ行く、恍惚として、  
蒼ざめし吃水線の 水死人 時をり思ひに沈みつつ。

その大海に、忽焉と波の群青を色に染め、……

この bleu に照応するものであらう。(bleu については既述参照)

Le travail fleuri de la campagne の campagne はこの少し後に出て  
くる

Dans les villes la boue n'apparaissait soudainement rouge et  
noire, comme une glace quand la lampe circule dans la chambre  
voisine, comme un trésor dans la forêt !

突然、俺の眼に、街々の泥土は赤く見え黒く見えた、隣室の燈火  
が動く時の鏡のやうに、森に秘められた宝のやうに。

にやむる villes に対する campagne である。即ちこの campagne の  
ciel bleu に照応するもので、同じく現世否定の彼方にひらかれた寂靜  
の世界、空の世界の意味でいふものである。かくてこの campagne にお  
ける le travail fleuri とはランボオ的世界、乃至はランボオ的世界をひ  
らくものとしての労働をいふわけである。fleuri はその意味でいふので  
ある。

Cf. Chanson de la plus haute Tour.

Ainsi la Prairie

地獄の 一季節註解

A l'oubli livrée,

Grandie, et fleurie

D'éencens et d'ivraies

Au bourdon farouche

De cent sales mouches.

忘れ去られた

牧野ときたら

香と毒麦身につけて

ふくらみ、花を咲かすのだ、

汚い蠅等の残忍な

翅音も伴ひ。

なほ右の詩句には註解を必要とするのであらうが、la Prairie はランボオ  
的世界を指すものと考へられる(Cf. Fêtes de la Faim.)。この Prairie  
が花を咲かすといつてゐるのである。

Cf. Fleurs.

Tels qu'un dieu aux énormes yeux bleus et aux formes de  
neige, la mer et le ciel attirent aux terrasses de marbre la  
foule des jeunes et fortes roses.

巨きな青い眼で、雪のいろいろの形をした神様のやうに、海と空  
とは、この大理石の台の上に、若々しくて強烈な薔薇の群を引き寄  
せる。

かかる海と空とが、花を引き寄せるとは、やはり否定を媒介とすること  
において眞実なる世界、ランボオ的世界がひらかれることをいふのであ

らう。だから「花さく労働」とは眞実なる世界、ランボオ的世界の、乃至はそれを開くものとしての労働をいふわけである。(ランボオにおいては *métiers* としての労働は否定せられてゐる。)

Aube における

La première entreprise fut, dans le sentier déjà rempli de  
frais et blêmes éclats, une fleur qui me dit son nom.

最初、俺に絡んだ出来事は、既に爽やかな蒼白い光の満ちた小径  
で、一輪の花が、その名を俺に告げた事だった。

右の箇所はこと連関がある様であり、示唆するところがある。

Adieu, p. 84 以下

J'ai essayé d'inventer de nouvelles fleurs, de nouveaux astres,  
de nouvelles chairs, de nouvelles langues.

俺は新しい花を、新しい星を、新しい肉体を、新しい言葉を発明  
しようとした。

といつてゐる。

かくて彼のイデーを以つて *ciel bleu* を見、 *travail fleuri de la campagne* を見たとは、この *forcât intraitable* によつて死の世界、寂靜の世界、空の世界を見たことをいふわけである。

je flairais sa fatalité dans les villes : —

かかる *forcât intraitable* が当然おくるであらう生活、そのあり方、現世否定の彼方にひらかれる死の世界、死ながら生きる生活を街々に嗅いだわけである。 *fatalité* といふ所以である。

Delires, I, p. 47 以下

nous voyagerons, nous chasserons dans les déserts, nous dor-  
mirons sur les pavés des villes inconnues, sans soins, sans  
peines.

二人して旅をしよう、無人の境に狩をしよう、見知らぬ街々の鋪  
石の上に、なげやりに苦もなく寝てしまはなう。

どうしてやるか。 L'Impossible, p. 67 以下

Ah ! cette vie de mon enfance, la grande route par tous les  
temps, sobre surnaturellement, plus désintéressé que le meilleur  
des mendians, fier de n'avoir ni pays, ni amis, quelle sottise  
c'était. — Et je m'en aperçois seulement !

(訳文前出)

どうしてやるか。このこと連関がありやうに思はれる。この文句  
ひをかいたのかもしれないと思はれる。

Il avait plus de force qu'un saint, plus de bon sens qu'un  
voyageur : —

否定を媒介とするところに、死を媒介とし死ながら生きるところにこそ、このすべあどづ *te voilà, c'est la force* といつてゐるやうに眞の強さが出てくるのである。完全な自己放棄、一切の執着からの離脱、そして前後際断的に一歩一歩に絶対の現成を行ずるところにこそ *faiblesse, force* にかかはらない、無畏の世界における *force* が出てくるわけである。

この *saint* は直接的にはキリスト教における *saint* を指してゐるのであらう。キリスト教における *saint* が彼岸的であるのに対して、この

forçat intraitable が此岸に神の現成を行わず人間であるとすれば、かかる人間こそ最も強い人間であるといつてよいであらう。

Cf. Chanson de la plus haute Tour.

.....

Craintes et souffrances

Aux cieus sont parties.

Et la soif malsaine

Obscurcit mes veines.

.....

じもる怖れや苦しみは

空に向つて「昨日」去つた。

「今」ただわけも分らぬ渴きが

私の血をば暗くする。

またそここそ最も具体的な、最も真実なる世界がひらかれるわけであるから、誰よりも正しい意味における bon sens が生れるわけである。

Mauvais Sang, p. 27 y-

je retiens ma place au sommet de cette angélique échelle de bon sens.

つまり俺は思慮分別の、天使のやうな梯子の天辺チムペンに、俺の座を占めてゐるのだ。

といつてゐる。ここはイノサンスに関して述べてゐるところであり、イノサンスをボンサンスの頂上においてゐるのである。イノサンスは、いはばランボオ的世界の到りついた頂点ともいへるのであるが、そのイノ

地獄の 一季節註解

サンスをボンサンスの頂上においてゐるのである。ボンサンスなる語をかかる意味で使つてゐるのである。だから plus de bon sens ..... と云つてゐる意味は、いはば相対を超えた、より正しい真実なる認識の意味でいつてゐるものと考へてよいであらう。

et lui, lui seul ! pour témoin de sa gloire et de sa raison : —

じの raison と云ふ語は知性の意味に使つてゐる場合もあるが、じは A une Raison にあける

Un coup de ton doigt sur le tambour décharge tous les sons et commence la nouvelle harmonie.

.....

Ta tête se détourne : le nouvel amour ! Ta tête se retourne, — le nouvel amour !

お前の指先が太鼓を一弾きすれば、音といふ音が放たれ、新しい諧調は始まる。

.....

お前が頭を廻らせば、新しい愛だ。頭を復せば、——新しい愛だ。あつてはまた Génie にあける

Il est l'amour, mesure parfaite et réinventée, raison merveillieuse et imprévue, et l'éternité :

彼こそは、再創始された完全な尺度たる、予見を許さぬ驚く可き理智たる愛であり、また永遠である。

かかる raison と同じ意味で使はれてゐるものがある、L'Impossible, p. 69 で

je retourne à l'Orient et à la sagesse première et éternelle.

俺は再び東洋に帰った。永遠の、当初の睿知に帰った。

といつてゐるこの *sagesse* に当る意味をもつてゐるものと考へるべきである。

Lui, lui seul! とは、前述のキムにランボオはじの *forçat intraitable* によつて、それは自己の世界展開のきつかけが与へられたのであり、そこに感嘆の叫び声に近い声を発したわけである。その感情の表現と見てよむべきであらう。Mauvais Sang, p. 15- p. 18 にわたつて、フランスの歴史の回顧をしてゐるところで、所詮フランスの歴史の中には自己の安住の世界のないことを語つてゐるところを考へ合せれば、Lui, lui seul とする言葉が強へひびくところをわけである。

Sur les routes, par des nuits d'hiver, sans gîte, sans habits,  
sans pain, une voix éteignait mon cœur gelé : 《 Faiblesse ou  
force : te voilà, c'est la force. Tu ne sais ni où tu vas, ni  
pourquoi tu vas, entre partout, réponds à tout. On ne te  
tuera pas plus que si tu étais cadavre. 》 Au matin j'avais le  
regard si perdu et la contenance si morte, que ceux que j'ai  
rencontrés ne m'ont peut-être pas vu.

冬の夜々、宿もなく、着るものもなく、麵麴もなく、街道を徘徊行き、俺の五ついた心は一つの声に締めつけられた。「弱気にしろ、強気にしろだ、貴様がさうしてゐる、それが貴様の力ぢやないか。貴様は何処に行くのか知りはない、何故行くのかも知りはない、

ない、何処へでも到る所に入つて行け、何にでも返答をしろ。貴様が仮りに屍体であつたとしたら、それ以上に殺さうとする奴もあるまい。」夜が明けると、俺の眼は光を失ひ、振舞に生きた色なく、行き会つた人々も、恐らくこの俺を俺とは見なかつた。

Sur les routes, par des nuits d'hiver, sans gîte, sans habits,  
sans pain, une voix éteignait mon cœur gelé : ——  
前の段落でランボオの世界のひらけぞめのきつかけを与へた *forçat intraitable* の追憶が語られ、この段落で再び還相行への出発が語られるのであつた。

Sur les routes, par des nuits d'hiver, sans gîte, sans habits, sans pain は現世否定の彼方の死の世界、寂靜の世界、往相の世界、一切を捨離して、無一物を行つて、無所住に住する世界を語るものである。既に *わづらふことゝあはれか、L'Impossible*, p. 67 や

Ah! cette vie de mon enfance, la grande route par tous les temps, sobre surnaturellement, plus désintéressé que le meilleur des mendiants, fier de n'avoir ni pays, ni amis, quelle sottise c'était. —— Et je m'en apeçois seulement!

この *わづらふことゝあはれか* に正しく照応するものがある。また *Délirés*, I, p. 46 や

il ne travaillera jamais. Il veut vivre somnambule..... nous voyagerons, nous chasserons dans les déserts, nous dormirons sur les pavés des villes inconnues, sans soins, sans peines.

(訳文前出)

とじつてゐるところにも照応するものがあつた。かかる世界にあるのが *mon cœur gelé* である。死の世界、空の世界に沈没した *cœur* をいふのである。既に前にも引用したのだが *Barbare* である。

Oh! Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et des fleurs arctiques; (elles n'existent pas.)

Douceurs!

Les brasiers, pleurant aux rafales de givre, — Douceurs!

— les feux à la pluie du vent de diamants jetée par le cœur terrestre éternellement carbonisé pour nous. — O monde! —  
.....

et la voix féminine arrivée au fond des volcans et des grottes arctiques.

ああ、血を滴らす生肉の旗、海の網と北極の花々の上に。(これもこの世に存在せぬが。)

優美なものよ。

炭火は、氷花の旋風に吹かれて雨と降る、——優美なものよ。

——俺達の為に永劫に炭化された大地の心が、金剛石の風雨を投げかける、その火だ。——ああ、世界よ。——  
.....

そして火山と北極の洞窟との奥底までも行きついた女の声。

とじつてゐるところや、また *Promontoire* である。

..... *des crevasses de fleurs et d'eaux des glaciers*; .....

地獄の 一季節 註解

..... 花と氷河の水との罅れ目の谿。.....

といつてゐる様に、往相の世界、死の世界、寂靜の世界が一方、北極、氷河、氷花などを以て象徴せられ、他方、還相面が、血を滴らす生肉の旗、炭火、火山、花、女の声などで象徴せられて、有と無との交互媒介の世界が語られてゐる。これらと同じ様に今も往相面の *cœur* を指して *cœur gelé* とじつてゐるのである。

かかる死の世界、往相面に対して、つぎのやうな言葉を以て語りかけ還相面へと向はせるわけである。

*Faiblesse ou force: te voilà, c'est la force: —*

そこに現前してゐるといふこと——その強弱は問ふところではない。——そのこと自体が絶対の強さなのである。——といふことは、現前してゐる一切の有の絶対肯定を意味するものであり、かかる一切の有の絶対肯定は一時一時の一事一事が即絶対、神の現成であるからである、無所去、無所従来の一切の有を媒介として絶対、神が現成するからである。即ち一切の有が即絶対の真理なる故の強さなのである。

Cf. *Génie*.

*Il ne s'en ira pas, il ne redescendra pas d'un ciel, il n'accomplira pas la rédemption des colères de femmes et des gaités des hommes et de tout ce péché: car c'est fait, lui étant, et étant aimé.*

彼は何処にも立ち去りはしまい、空から下りても来まい、女共の憤怒と男共の上機嫌とこの罪業全部との、贖ひを遂げようともしまし。何故なら、彼が存在し、愛されてゐる限り、もう出来てゐるの

だから。

だからこそ“Eternité”は“retrouver”されるのであり、

Puisque de vous seules,

Braises de satin

Le Devoir s'exhale

Sans qu'on dise : enfin.

繻子の肌した深紅の燠よ、

それのおまへと燃えてゐれよ、

義務はすむといふものだ

やれやれといふ暇もなく。「遂にといふことなした。」

ともいふわけである。一期一会である。かかる Le Devoir s'exhale なる言葉は否定を媒介とする一切の有の絶対肯定の立場に於いてのみいひ得る言葉であり、一時一時の一事一事が即絶対であり神である前後際断行なるじつを Sans qu'on dise : enfin がよく示している。じつに任運の自然法爾の軽やかなる出てくるわけであり、

Cf. Bannières de Mai.

Je veux que l'été dramatique

Me lie à son char de fortune.

Que par toi beaucoup, ô Nature,

— Ah moins seul et moins nul ! — je meure.

ドラマチックな夏こそは

『運』の車にこの俺を、縛ってくれるほどよろし、

自然よ、おまへの手にかかり、

——ちつとはましに賑やかに、死にたいものだ！

莫作の世界も可能であるわけであり、

Cf. Bannières de Mai.

A toi, Nature, je me rends ;

Et ma faim et toute ma soif.

Et, s'il te plaît, nourris, abreuve.

自然よ、此の身はおまへに返す、

こんな渇きも空腹も。

お気に召したら、食はせろよ、飲ませろよ。

日日は好日でもあるわけであり、

Cf. Mauvais Sang, p. 25.

Je n'ai point fait le mal. Les jours vont m'être légers, Je  
repentir me sera épargné. Je n'aurai pas eu les tourments  
de l'âme presque morte au bien, où remonte la lumière sévère  
comme les cierges funéraires.

俺は悪を少しも冒してゐなかつた。その日その日は爽かに過ぎて行き、先き先き後悔する事もなからう。善において殆ど死んだやうになつてゐる俺の魂、葬ひの蠟燭のやうに厳しい光が浮き上る俺の魂に、悩みはなかつたのであらう。

またすべての人の脱し得ぬ幸福の宿命 (fatalité du Bonheur) とするよりも、真にいひ得たのである。

かくて O saisons, ô châteaux /……の詩 (前掲参照) も出てくるのであり、Bannières de Mai に於いて



じこからランボオの愛、慈悲、救済も出てくるのである（後述参照）。

Cf. Génie.

Il est l'affection et le présent puisqu'il a fait la maison ouverte à l'hiver écumeux et à la rumeur de l'été, lui qui a purifié les boissons et les aliments, lui qui est le charme des lieux fuyants et le délice surhumain des stations. Il est l'affection et l'avenir, la force et l'amour que nous, debout dans les rages et les ennuis, nous voyons passer dans le ciel de tempête et les drapeaux d'extase.

.....

Son corps ! Le déagement rêvé le brisement de la grâce  
croisée de violence nouvelle !

泡立つ冬に、夏のざわめきに、家を開け放ったからには、彼は愛情だ、現在だ。飲料を清め、食物を清めた彼、移り行く様々な地点の魅惑でもあり、様々な停止点の超人的な歓喜でもある彼。彼は愛情であり、未来である。力であり愛である。俺達は憤怒と倦怠との裡に佇んで嵐の空と恍惚のはためく旗の間に、さういふ彼の姿が通って行くのを眺めるのだ。

.....

彼の肉体。熱望された開放。新しい暴力の貫く優雅の破碎。

あざこは *Délires*, I, p. 47 における

nous voyagerons, nous chasserons, dans les déserts, nous dormirons sur les pavés des villes inconnues, sans soins, sans

peines.

二人して旅をしよう、無人の境に狩をしよう、見知らぬ街々の舗石の上に、なげやりに苦もなく寝てしまはう。

どうしてどうしてか、かかる一切を是とする任運行から解釈されるべきであらう。

On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre : —

かかる一切を是とする絶対肯定の『嫌ふ底の法なき』任運行は、いふまでもなく否定を、死を媒介とする世界である。いはばそれは死にながら生きて行く世界である。死即生、生即死である。

Cf. *Matinée d'Ivresse*.

Cela commençait par toute la rustretie, voici que cela finit  
par des anges de flamme et de glace.

.....

Nous savons donner notre vie tout entière tous les jours.

Voici le temps des *Assassins*.

あらゆる粗暴の裡に始まったが、今、焰と氷の天使等によって終るのだ。

.....

いつの日にもこの命を洗ひざらひ投げ出す事を知ってる。

今こそ、『刺客達』の時である。

この「焰と氷の天使等によって終る……」といふのも同様有無交互媒介、死は即生、生は即死を意味してゐるのである。

Cf. *Vies*, III.



ともいふわけである。

Adieu, p. 85 に於ける、

Enfin, je demanderai pardon pour m'être nourri de mensonge.

Et allons.

最後に、俺は自ら虚偽をもって身を養つてゐた事を謝罪しよう。

やう行くのだ。

かかる言葉も、全く同様に還相面への轉換に際しての言葉と解すべきものであらう。否定的往相面への Adieu であり、否定であり、謝罪であり、Paysan の世界に向つて Et allons といふわけである。

Mauvais Sang, p. 26 より

Adieu chimères, idéals, erreurs !

妄想よ、理想よ、「観念よ」、過失よ、おさらばだ。

といつてゐる。単なる否定的往相面が妄想であり、具体性をもたぬ観念的世界に過ぎず、やうには錯誤むすらあるとして、かかる世界に向つて訣別を告げるわけである。

Cf. Délires, I, p. 45—p. 47.

Il a peut-être des secrets pour changer la vie ? .....

Ou je me réveillerai, et les lois et les mœurs auront changé,

—— grâce à son pouvoir magique, —— Le monde, en restant le même, me laissera à mes désirs, joies, nonchalancees.

この人は多分人世を、変へる秘密を持つてゐるのでせうか。……

或はまた、眼が覚めてみると、——あれの魔法の御蔭で、——世の掟も習ナラハシも屹度変つてゐるだらう、この世は變つてゐなくても、

妾の希ひや、歎びや、暢気その邪魔するものはあるまい。

Dans les villes la boue m'apparaissait soudainement rouge et noire, comme une glace quand la lampe circule dans la chambre voisine, comme un trésor dans la forêt ! Bonne chance, criais-je, et je voyais une mer de flamme et de fumée au ciel ; et, à gauche, à droite, toutes les richesses flambant comme un milliard de tonnerres.

突然、俺の眼に、街々の泥土は赤く見え黒く見えた、隣室の燈火が動く時の鏡のやうに、森に秘められた宝のやうに。運が好いぞ、と俺は叫んだ。そして俺は天上に焰と煙との海を見だし、左に右に、数限りない霹靂のやうに、燃え上る豊麗を見た。

Dans les villes la boue m'apparaissait soudainement rouge et noire, comme une glace quand la lampe circule dans la chambre voisine : ——

かくて最も具体的なる、真実なる世界がひらけ大轉換をとげたランボオに向つて街の泥が rouge et noire, comme une glace,……comme un trésor と見えたのである。

泥が赤く見え黒く見えたとは如何なる意味であらうか。既述のごとくランボオにおいては、色彩は多くの場合に象徴の意味をもつてゐる。rouge については既述のやうに否定行のはげしさ、動的なはげしさ、熱情的なもの象徴として多く使はれてゐる。ここではその否定せられる

へき世界の象徴、即ち醜悪なるものの象徴として使はれてゐるのである。  
noire については、ほとんどすべてを通じて醜悪なる世俗世界、近代ヨーロッパ文化の世界を象徴してゐる。

Cf. Bateau ivre.

Si je désire une eau d'Europe, c'est la fache

Noire et froide où vers le crépuscule embaumé

Un enfant accroupi plein de tristesses, lâche

Un bateau frêle comme un papillon de mai.

若しわれにして歐羅巴の、今なほ、水を望むとせば「とも」

そは冷かなる黝き隅沼、風薫る夕暮ときに、

悲しみの溢るる童子蹲踞りて、五月の蝶を

さながらの木葉の小舟を放ちやる森の水沼。

Cf. Voyelles.

A noir, ……

……………

A, noir corset velu des mouches éclatantes

Qui bombinent autour des puanteurs cruelles,

Golfes d'ombre;

A は黒、……

……………

A、無慙なる悪臭の周囲に唸りを立てて飛ぶ

燦めく蠅の毛斑の黒き胸当

地獄の一章節註解

日陰の入江。

かくて赤く見え黒く見えたとは、世俗の醜悪さをさしていつてゐるもの  
と考へられるのであるが、Enfance にあらず

A une distance énorme au-dessus de mon salon souterrain,  
les maisons s'implantent, les brumes s'assemblent. La boue  
est rouge ou noire. Ville monstrueuse, nuit sans fin!

俺の地底のサロンの上を遙かに遠く隔って、人々の家が並び立ち、  
霧が立ちこめる。泥は赤く或は黒い。怪物の都会、果てしない夜。  
といつてゐるところは、ほとんど決定的にこの意味をも示してゐるも  
のと考へてよいであらう。即ちやはり街の泥が赤く見え黒く見えたとは、  
その街が Ville monstrueuse であり、nuit sans fin であることを意味  
するものである。

しぎに boue はいふまでもなく停滞（停滞はランボオ的世界の否定、相對  
界、したがって同時に醜怪なる世俗界を指す。）を意味する。

Cf. Mémoire, 5.

ô canot immobile! oh! bras trop courts! ni l'une

ni l'autre fleur: ni la jaune qui m'importune,

là; ni la bleue, amie à l'eau couleur de cendre.

……………

Mon canot, toujours fixe; et sa chaîne tirée

Au fond de cet œil d'eau sans bords, — à quelle boue?

おお、動かぬ丸木舟よ！ 短かすぎる僕の腕よ！

どの花も摘むことが出来ない。心にかかる黄色い花も、  
灰色の水によく相応ふ青い花も。

.....

丸木舟はいつもつながれてゐる、その鎖をば  
ひろびろとしたこの流れの眼の底に曳きずって、——どんなに泥深  
いかしら？

marais, flache は boue に連関して同じやうな意味に使はれ  
る。かくて以上 Dans les villes la boue n'apparaissait soudainement  
rouge et noire は街の醜悪、醜怪なることを意味するわけである。

それが同時にまた glace のごとくに、trésor のごとくに見えたとい  
ふのもまた、glace のごとくに見えたとは如何なる意味であらうか。  
glace のごとく——

Cf. Matinée d'ivresse.

Cela commençait par toute la rustretrie, voici que cela finit  
par des anges de flamme et de glace.

あらゆる粗暴の裡に始まったが、今、焰と氷との天使等によつて  
終るのだ。

anges de flamme et de glace によつて終るといふやうな対称的な用法  
を示してゐる。これはこの一篇全体から見ても、またランボオの全作品か  
ら考へて、有即無、否定即肯定、肯定即否定の關係を示すものと考へら  
れる。もちろん glace は flamme に対して、その否定的無の面を示す

ものである。

Cf. Métropolitain.

Le matin où avec Elle, vous vous débâtîtes parmi les éclats de  
neige, ces lèvres vertes, les glaces, les drapeaux noirs et les rayons  
bleus, et les parfums pourpres du soleil des pôles,——ta force.

朝になると、雪の輝きや、緑の唇や、氷、黒い旗、青い光線、極  
地の太陽の深紅の芳香のなかに立ち交つて、『女』と一緒に、君た  
ちは腕いたのだ。——君の力だ。

ここにいろいろ éclats de neige, lèvres vertes, glaces, rayons bleus  
が drapeaux noirs, parfums pourpres と対称的に用ひられてゐる。世  
俗の象徴たる「女」と一緒にもがいたとある。これも否定即肯定、肯定  
即否定の關係を示すものと考へられる。

Cf. Barbare.

Oh ! Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et  
des fleurs archiques ; (elles n'existent pas.)

Douceurs !

Les brasiers, pleuvant aux rafales de givre, —— Douceurs !

—— les feux à la pluie du vent de diamants jetée par le cœur  
terrestre éternellement carbonisé pour nous. —— O monde ! ——

(Loin des vieilles retraites et des vieilles flammes, qu'on  
entend, qu'on sent.)

ああ、血を滴らす生肉の旗、海の網と北極の花々の上に。(いづれ  
もこの世に存在せぬが。)

優美なものよ。

炭火は、氷花の旋風に吹かれて雨と降る、——優美なものよ。

——俺達の為に永劫に炭化された大地の心が、金剛石の風雨を投げ

かける、その火だ。——ああ、世界よ。——

(人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隠遁や古めかしい情火とは、遙かに遠く離れて)

パヴィヨン、  
arctiques とが、また rafales de givre, vent de diamants が、brasier,  
feux と対称的に用ひられてをり、上記同様有即無、無即有、否定即肯定、肯定即否定の關係を示してをり、かかる世界を douceur の世界としてゐるのである。この Barbare の最後のところへ

et la voix féminine arrivée au fond des volcans et des grottes  
arctiques.

そして火山と北極の洞窟との奥底までも行きついた女の声。

といつてゐるのも同様の關係を示すものと考えることができる。

以上、いづれも表裏、正反相反する言葉を対称的に対立的に使つてゐるのは、相反するものが相反しながら、即の關係をもつて結びつくことを示してゐるのであり、「自己は他者である」とランボオ自らが言つてゐるのと同じ認識を示すものであり、ランボオの窮極において到達した世界を示すものである。

かくて街の泥が、glace のごとく赤く見え黒く見えたとは、それが赤く黒く醜悪であるとともに、その醜悪なる世界が即寂靜の世界、清浄なる世界であることを意味してゐるのであり、そこにこそ Douceur が出

てきたのである。言葉をかへていへば汚濁即清浄、清浄即汚濁の世界、douceur の世界であることを意味するものである。

comme un trésor dans la forêt: ——

trésor de Mauvais Sang, p. 19 に於ける de l'or と同様、ランボオ的世界を意味するものや diamant (Solde), pierres précieuses (Après le Déluge), boules de saphir (Enfance) などと同様の使ひ方をしてゐる言葉もある。即ち rouge et noire の醜悪なる世界がその赤き trésor なのである。現世の絶対肯定を意味するものである。

forêt は Marine に於ける

Les courants de la lande,

Et les ornières immenses du reflux,

Filent circulairement vers l'est,

Vers les piliers de la forêt, ——

Vers les fûts de la jetée,

Dont l'angle est heurté par des tourbillons de lumière.

荒野の潮流と、

引潮の広大な轍は、

円を描いて流れ去る、東の方へ、

森の列柱の方へ、——

突堤の洞中の方へ、

その角は光の渦巻きと衝突する。

この forêt と同じく寂靜の世界を意味するのである。この Marine 自体が晦澁難解であつて詳細なる註解を必要とするものであるが、今は一切

を省いて必要な最少限にとどめたい。Vers la forêt, Vers la jetée  
つれも寂靜の世界、死の世界めをしての意味でいつてみるのじやない。

Forêt にしつては、

Cf. Aube.

J'ai embrassé l'aube d'été.

Rien ne bougeait encore au front des palais. L'eau était  
morte. Les camps d'ombres ne quittaient pas la route du bois.

J'ai marché, réveillant les haleines vives et tièdes, et les  
pierreries regardèrent, et les ailes se levèrent sans bruit.

俺は夏の夜明けを抱いた。

館の前には、まだ何一つ動いてゐるものもなかった。水は死んで  
ゐた。其処此処に屯した影は、森の径を離れてはゐなかつた。俺は  
歩いた、生々とした、ほの暖い息吹きを目醒しながら。群なす寶石  
は眼を開き、鳥の群は音もなく舞ひ上った。

Cf. Ouvriers.

O l'autre monde, l'habitation bénie par le ciel et les ombrages !

おお、別の世界だ、空と樹蔭に恵まれた住居だ。

その他 Fairy におけり

Pour Hélène se conjurèrent les sèves ornamentales dans les  
ombres vierges et les clartés impassibles dans le silence astral.  
L'ardeur de l'été fut confiée à des oiseaux muets et l'indolence

requisse à une barque de deuils sans prix par des anses  
d'amours morts et de parfums affaissés.

エレヘヌの為に、裝飾的な樹液は、清浄な樹蔭に姿を潜め、無感  
動に輝く光は、星の沈黙の中に、身を避けた。夏の暑熱が、歌を唄  
はぬ小鳥に託され、懶惰放心が、死んだ恋や衰弱した薫の入江を横  
切る、価もない喪の小舟に於いて求められた。

これらのやうに、forêt は bois, ombres, ombrages などともに寂靜  
の世界、死の世界を意味してゐるのもある。

jetée も同様で、enfance における

Je serais bien l'enfant abandonné sur la jetée partie à la  
haute mer, le petit valet suivant l'allée dont le front touche le  
ciel.

本当に、俺は、沖合に遙かに延びた突堤の上に棄てられた少年か  
も知れぬ。行く手は空にうち続く道を辿って行く小僧かも知れぬ。

この jetée と同様寂靜の世界、空なる世界を意味してゐる。

かくて comme une glace の場合と同様に、赤く黒い泥が un trésor  
dans la forêt のうしろに見えたといふことは、醜悪醜怪なる街が即清  
浄なる寂靜の世界であることを意味するのである。

Bonne chance, criais-je : —

かかる往相即還相、還相即往相の世界、一切の有の否定を媒介とする  
絶対肯定の世界こそランボオの世界であった。この赤く黒い泥の汚濁の  
世界が即絶対であり、神であり、douceur の世界であり、幸福の世界で  
あったのである。今、cœur gelé をしめつけた一つの声に呼びやまや

れて、かかる世界が現成したわけである。 Bonne chance と叫ぶ所以である。そこにこそ、ゆるぎなき真の幸福、またその故にこそ何人も、のがれ得ぬ凡ての人の幸福があるのである。

Cf. O saisons, ô Châteaux.

J'ai fait la magique étude

Du Bonheur, que nul n'élude.

私の手がけた幸福の

秘法を誰が脱れ得よう。「一切を包む「幸福」の不可思議を明めたのだ。」

Cf. Délires, II, p. 60.

je vis que tous les êtres ont une fatalité de bonheur :

俺はすべての存在が、幸福の宿命を持ってゐるのを見た。

ランボオにおける幸福は、かかる fatalité としての、したがって如何なる人も逃れ得ぬ底の幸福であったのである。それはいはば一切の有の根拠としての神の世界における幸福であったのである。根拠としての世界なる故に如何なる人も逃れ得ぬ、宿命としての幸福であったのである。今、往相即還相、還相即往相としての、否定を媒介とする絶対肯定に、かかる根拠としての世界、神の世界を覚知し、そこにゆるぎなき真の幸福を覚知して Bonne chance なる叫び声、感嘆の声を発したわけである。

et je voyais une mer de Flamme et de fumée au ciel : —

この Flamme と fumée との海とは何を意味するの。 Flamme は前に引用した Matinée d'Ivresse における

Cela commençait par toute la rustreterie, voici que cela finit

par des anges de Flamme et de glace.

(訳文前出)

この anges de Flamme et de glace の Flamme に照応するものである。即ち前記の意味での glace に対する Flamme であり、無に対する有、静に対する動の世界を象徴するものと考えられる。

fumée は、やはり同じく引用した Enfance における

A une distance énorme au-dessus de mon salon souterrain,  
les maisons s'implantent, les brumes s'assemblent. La boue  
est rouge ou noire.

Ville monstrueuse, nuit sans fin !

(訳文前出)

この brumes に照応するものである。街のものとして、醜悪なるものとして、salon souterrain に対するものである。即ち Flamme と同様に結局は無に対する有、清浄に対する汚濁を象徴するものと考えられることができる。

かくて une mer de Flamme et de fumée とは醜悪なる汚濁にみちた一切の有の世界を指すものと考へることができる。

それを空に (au ciel) 見たとは、ciel は死の世界、寂静の世界、往相の世界を象徴するものであるので、有即無、無即有、往相即還相、還相即往相を覚知したことを意味するものと考えられるのである。

et, à gauche, à droite, toutes les richesses flambant comme  
un milliard de tonnerres : —

かかる世界の展開においてはじめて真に豊かさが出てくるのである。

観念的、抽象的ならぬ此岸的、具体的なる世界であるからである。a gauche, à droite とは、いはば尽十方界を意味するのであらう。一時一時の一事一事が、否定を媒介として、絶対肯定され、一切の有が即絶対であり、神である世界において tout les richesses が現成するわけである。固定化されない、生々流転の世界のもつ richesse であり、軽さであり、爽かさである。行雲流水、自然法爾の richesse である。

もちろぬ、この richesse は有の直接肯定に出づくる richesse ではなく否定を媒介とするものである。したがって「死の友」amis de la mort とこの domesticité, mendicité, brigands, arriérés を媒介とするものである。したがってランボオも、かいつはかかる domesticité, mendicité, brigands, arriérés に対つて jalousie を感じているのである。

Cf. Adieu, p. 86.

Mes derniers regrets détalent, — des jalousies pour les mendians, les brigands, les amis de la mort, les arriérés de toutes sortes. — Damnés, si je me vengeais !

俺の最後の未練も逃亡する、——乞食、盗賊、死の友、全ての種類の落伍者に対する羨望だ。——地獄に堕ちた亡者共、若し俺が復讐するとしたら。

あゝは Jeunesse, III, Vingt Ans や

Un chœur, pour calmer l'impuissance et l'absence !

合唱だ、無力と欠乏とを鎮める為に。

どうしてあんなやうに、かかる l'impuissance, l'absence の世界を媒介とするのである。しかもかかる l'impuissance, l'absence を calmer

るために un chœur が必要であつたやうに、かかる死の友としての domesticité, mendicité, brigands, arriérés の世界はさらに否定せられ、damnés とせられ、いはば否定の否定、絶対否定即絶対肯定として、ここに一切の有が肯定せられ、有が有のまま即絶対であり神であるところに、生々流転してやまない軽やかな richesse が出てくるのである。

かくて Nuit de l'Enfer, p. 35 や

plus de foi en l'histoire, l'oubli des principes. Je m'en tairai : poètes et visionnaires seraient jaloux. Je suis mille fois Je plus riche, soyons avare comme la mer.

最早歴史も信ぜず、諸原理も忘れ去る。だがそれについては語るまい。詩人達、夢想家達は羨望するかも知れない。奴等より俺の方が、千倍も豊かである。海のように貪婪にならう。

かくいふわけであつて Solde にちよつと

Les richesses jaillissant à chaque démarche ! Solde de diamants sans contrôle !

……………

l'immense opulence inquestionable, ce qu'on ne vendra jamais. 歩むに従つて、迸り出る様な富。無統制のダイヤモンドの投売り。

……………

まことに途轍もない豪華だ。将来も断じて売手はないものだ。

かくいふわけである。

どうしてこの richesse は同じく Solde や

Élan insensé et infini aux splendeurs invisibles, aux délices

insensibles, — et ses secrets affolants pour chaque Vice — et sa gaîté effrayante pour la foule.

不可見の光彩、不可知の歓喜への、狂気じみた、無際限の飛躍。

——そしてその物狂ほしい様々な秘密は、各人の悪徳のためだ、——その恐ろしい喜悅は群集のためだ。

といつてゐるやうに、Viceのためであり、Fouleのためのものである。彼岸の世界のものではなくて、汚濁の世界の生きた現世として此岸のためのものである。またかかる此岸においてこそ枯渴することのない、觀念化抽象化されることのない、生きた血の流れた暖かい豊かさ、流転してやまない豊かさが現成するのである。觀念化され抽象化された彼岸の世界には、流転してやまない、血の流れるやうな豊かさは生れないのである。

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes n'étaient interdites. Pas même un compagnon. Je me voyais devant une foule exaspérée, en face du peloton d'exécution, pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre, et pardonnant! — Comme Jeanne d'Arc! — 《Prêtres, professeurs, maîtres, vous vous trompez en me livrant à la justice. Je n'ai jamais été de ce peuple-ci; je n'ai jamais été chrétien; je suis de la race qui chantait dans le supplice; je ne comprends pas les lois; je n'ai pas le sens moral, je suis une brute: vous vous trompez……》

だが、酒宴も女たちとの交友も、俺には禁じられてゐた。一人の

仲間さへなかつた。俺は銃殺執行班に面と向つて、激怒した群衆の前に立つてゐたのだ、彼等には了解し得ない不幸に戯きながら、そして彼等を宥しながら。——まるでジャンヌ・ダルクだ。——「司祭や教授や先生方、俺を裁判所の手に渡したといふのが君達の誤りだ。俺はもともと、ここに居るこの民族に属してゐたことがない。基督教徒だつた事は一度もない。刑罰を受けながら歌を歌つてゐた人種だ。法律など解りはしない。道徳的意識も持つてゐない。俺は一個の禽獣なのだ。君達は思違ひをしてゐるのだ……」

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes n'étaient interdites: —

普通に人の心を遊ばせ、楽しませるものとしては orgie と camaraderie des femmes とはその尤ださものともしへよう。しかしランボオにとってはかかる世界は否定せられるべき、また、事実否定せられた世界であつた。ランボオの世界は一切の有の否定に出発してゐるのだからそれは当然のことである。

もろのランボオといふ Une Saison en Enfer, p. 7 y

Jadis, si je me souviens bien, ma vie était un festin où s'ouvraient tous les cœurs, où tous les vins coulaient.

嘗ては、若しはつきりと思ひ出すなら、俺の生活は饗宴であつた。全ての人の心は開き、あらゆる葡萄酒は流れ出した饗宴であつた。といつてゐるやうに、かつてはかかる世界の中にもゐたのであらうが、同、八頁で

Sur toute joie pour l'étrangler j'ai fait le bond sourd de la bête féroce.

あらゆる歡びを絞殺する為に、その上に猛獸のやうに聲音を忍ばせて躍りあがったのだ。

といつてゐるやうに、かかる歡びの世界は一切否定せられたのであった。そこにランボオの兇暴に近いまでの激しい否定行があつたのである。その果に死の世界、bleu blancの世界が現出し、一旦はそこに sœur de charité を見出したのであるが、さらにそれが否定転換せられて innocence の世界が出てきたのである。

特に女については徹底的な否定的態度が顕著であり、女は世俗、醜悪なるもの象徴として扱つておゐるのである。Délires, I はその最も典型的なるものであり、これはランボオの世界と女(世俗)との対比の構成をとつてゐるものともいへよう(後述参照)。この中ではたゞは四十三頁

《Il dit : « Je n'aime pas les femmes. L'amour est à réinventer, on le sait. Elles ne peuvent plus que vouloir une position assurée. La position gagnée, cœur et beauté sont mis de côté : il ne reste que froid dédain, l'aliment du mariage, aujourd'hui. Ou bien je vois des femmes avec les signes du bonheur, dont, moi, j'aurai pu faire de bonnes camarades, dévorées tout d'abord par des brutes sensibles comme des bûchers……. »

あれは申します、『俺は女なんか愛してはゐない。恋愛〔愛〕といふものは、承知だらうが、でっち上げるものなんだ。〔再発明さ

れねばならないものなんだ。〕女どもは身のきまりがつけ度いと思ふだけで精々だ。身のきまりがつけば、美も心もそっちのけた。唯一つ残るものは冷い侮蔑で、それが、今日、結婚の糧だといふわけだ。さもなければ俺は、この俺ならばいいお友達にしてやる事が出来たかもしれない、幸福さうな様子をした女共が、『よき友とすることができたであらう様な幸福の徴候をもつた女どもは、〕薪小屋みたいに燃えつき易い獣達に、頭からぼりぼり喰はれる処を拝見するだけだ〔まっさきに喰はれてゐるのだ。〕……』

といつてゐる。その否定は徹底的であり、憎悪の念をすら感ぜしめるものがある。たとへば Les Sœurs de Charité にかゝつて

Mais, ô Femme, monceau d'entrailles, pitié douce,  
Tu n'ies jamais la Sœur de charité, jamais,  
Ni regard noir, ni ventre où dort une ombre rousse,  
Ni doigts légers, ni seins splendidement formés.

Avengle irréveillée aux immenses prunelles,  
……………

しかし、世の女人よ、臍腑の塊り、優しげな憫れな者よ、お前は断じて、断じて看護、修道尼ではない、お前は黒い眼差も、栗色の影のまごころむお腹も、軽やかな指も、ふつくらとした乳房も持つてはゐない。

大きな眸子ヒトメはありながら目覚ます術なき盲目の女人よ、

……  
においては、臟腑の塊りとして、目覚めさせるすべもない「盲目」としての女に対する憎悪の気持すらが見られるのである。

その他 Adieu, p. 87 じゃ

J'ai vu l'enfer des femmes là-bas ; —

俺は遙か彼方に女共の地獄を見た、——

と書いてをり、Conte じゃ

Toutes les femmes qui l'avaient connu furent assassinées.

彼を知った女達は、すべて殺された。

と書いてある。

かく女は所詮は醜悪なる世俗、それも目覚めさせるすべもない「盲目」として徹底的に否定せられるのであるが、かかる女も還相行においては絶対肯定的に肯定せられるのである。かかる絶対肯定的に肯定せられた女を、女王 *reine* と呼んでゐるのである。

Cf. Royauté.

Un beau matin, chez un peuple fort doux, un homme et une femme superbes criaient sur la place publique. « Mes amis, je veux qu'elle soit reine ! » « Je veux être reine ! » Elle riait et tremblait. Il parlait aux amis de révélation, d'épreuve terminée. Ils se pâmaient l'un contre l'autre.

ある美しい朝、如何にも気の優しい人々の間にたち交って、素晴らしい一人の男と素晴らしい一人の女とが、広場に叫んでゐた。『皆さん、私は彼女を女王にしたいのだ。』『妾は女王様になりた

地獄の 一季節註解

い。』女は笑ひ、身を顛はしてゐた。男は天啓に就いて、既に了った試煉に就いて、人々に語った。二人は抱き合つて気が遠くなつた。

即ち、un homme と une femme との合体融合に *reine* が現出するのである。それは言葉をかゝるといへば、un homme の現成としての *femme*、それが *reine* である。それが絶対肯定せられた女なのである。わざわざ引用した Métropolitain の

Le matin où avec Elle, vous vous débattîtes parmi les éclats de neige, ces lèvres vertes, les glaces, les drapeaux noirs et les rayons bleus, et les parfums pourpres du soleil des pôles, — ta force.

朝になると、雪の輝きや、緑の唇や、氷、黒い旗、青い光線、極地の太陽の深紅の芳香のなかに立ち交つて、『女』と一緒に、君たちは腕いたのだ。——君の力だ。

この Elle も世俗の女だが、また還相面における女である。Barbare と  
おなじ

——ô douceurs ! — et la voix féminine arrivée au fond des volcans et des grottes arctiques.

——ああ、優美なものよ、——そして火山と北極の洞窟との奥底までも行きつゝいた女の声。

と書いてある。douceur の世界の中に女の声肯定せられてゐるのである。しかしかかる還相面における肯定は徹底的な否定を媒介とするものであることを忘れてはならない。

Pas même un compagnon : —

Orgie & camaraderie des femmes も否定的に禁じられてゐるのみならず、一切の有の世界の絶対否定を媒介とする世界においては絶対の孤独は必然的結果ともいふやう。それは一切の社会の枠を破り、知性、概念を超え、言語を超えた世界であるから。Pas même un compagnon といふ所以である。Adieu, p. 85 以下

Mais pas une main amie ! et où puiser le secours ?

だが、友の手などいふ筈はない、救ひを何処に求めよう。

と云ふ Mauvais Sang, p. 16 以下

Je n'en finirais pas de me revoir dans ce passé. Mais toujours

seul ; sans famille ; .....

この過去の裡に、自分自身を見直してゐたら「キリあるも」限がある

まい。だがいつも俺は一人であつた。家族もなかつた。

と云つてゐる。また Les Secours de Charité 以下

.....

Il sent marcher sur lui d'atroces solitudes.

Alors, et toujours beau, sans dégoût du cercueil,

Qu'il croie aux vastes fins, Rêves ou Promenades

Immenses, à travers les nuits de Vérité,

.....

彼は感じる、兇暴な孤独が己れの上を歩き廻るのを。

かくてなほ、常に穩かに、茫漠たる最後の日の、

棺を厭ふ気配もなく、真理の夜を幾つも横切つて、  
はてしなく辿る夢想や逍遙、

と云つてゐるやうに atroces solitudes を感じたのである。

Je me voyais devant une foule exaspérée, en face du peloton  
d'exécution, pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre,  
et pardonnant ! — Comme Jeanne d'Arc ! : —

この peloton d'exécution に面してゐたのは、既にのびた Uue  
Saison en Enfer, p. 8 以下

J'ai appelé les bourreaux pour, en périssant, mordre la crosse  
de leurs fusils. J'ai appelé les féaux, pour m'étouffer avec le  
sable, le sang.

俺は死刑執行人共を呼び寄せたんだが、それは死にかけながらも、  
奴等の銃の台尻に咬みついてやるためだ。連枷責めの折檻を招いた  
が、それも血と砂とに塗れて自ら窒息するためだ。

この bourreaux をよび、 féaux を招いたとあるのに照応する言葉であ  
つて、一切の有の世界の否定行を意味する。Mauvais Sang, p. 27 以下  
ノサンヌについて述べてゐるところで

Je ne serais plus capable de demander le réconfort d'une  
bastonnade.

俺はもう鞭撻〔鞭刑〕の助力を頼むことも出来ないかも知れない。  
〔出来ませ。〕

と云つてゐる。この bastonnade を要求することもここに照応する。  
(もちろんこの条はこの立場をさらに否定したイノサンヌの立場を語つ

てゐるのだが）、その他 Conte における

Il tua tous ceux qui le suivaient, ……

彼は従ふ人々をすべて殺した。

これも同様に否定行を現はす言葉である。

そしてこれはランボオの世界展開のためには必須の歩むべき段階であつた。かかる“philosophie féroce”をもち、一切の有の否定行が演ぜられるとき、foule はその否定せられるべき現世世俗界なる故、その否定行に対して激怒するわけである。かくてランボオ的世界展開の過程として激怒した群衆 foule exaspérée に当面することは当然のことといへよう。

その否定行は、一切の有の世界を、二元相對の世界を超えた、一元絶對の世界、神の世界の追求に基くものであり、そこに一切の苦惱、煩悩、不幸から脱却して、自我をすてて (abnégation)、幸福 (Bonheur) の安住の世界を求めたのである。有の世界、相對の世界、したがって自我のたつところに一切の苦惱、煩悩、不幸の出发点があるのである。かくて苦惱、煩悩、不幸からの脱却には一切の相對的世界の否定による、そこからの超越が求められたわけである。

しかし、日常世俗界 (le monde) はかかる相對の世界、自我の世界の内に踰踏して、その故に不幸を不幸として自覚することがない。かくて pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre といふわけである。

foule が不幸を不幸として理解し得ぬ、その不幸に泣くことは、foule の立場から見ればそれは délire であり、désordre である。だから foule の立場から見れば délire, désordre としか考へられない行為によつてそランボオ的世界がひらかれたのである。かくて Délires, II, p. 66 へ

Je finis par trouver sacré le désordre de mon esprit.

この精神の乱脈も、所詮は神聖なものと俺は合点した。

かくいふわけである。また既述のやうな意味で

Oh ! ces jours où il veut marcher avec l'air du crime !

ああ、あの頃と来たら、あれは罪をひけらかして歩かうとしてゐるのです。

ともいひ、また *Matin*, p. 79 の

Vous qui prétendez que des bêtes poussent des sanglots de chagrin, que des malades désespèrent, que des morts rêvent mal, tâchez de raconter ma chute et mon sommeil.

動物は悲しみに噎び泣き、病人は絶望の声をあげ、死人は悪夢にうなされる、と語る汝らは、俺の墜落〔顔落〕と昏睡とを語らうと努めてくれ。「語ってみるがよい。」

かかる表現も出てくるのである。

foule の理解し得ぬ不幸を不幸として泣くことは、foule の世界の否定であり、したがって当然その激怒をかゝるわけであるが、今それに対して et pardonnant ! — Comme Jeanne d'Arc ! といふのは、明かにこゝにランボオの救済の思想が見られるのである。

ランボオにおいては、もちろん出发点ではその救済は自己の救済にあつた。絶対の世界、神の世界、最も具体的な真実なる世界に、一切の苦惱煩悩からの解脱を求めたのである。その過程が Une Saison en Enfer 全篇の示す悪戦苦闘であつたのである。“Ma faiblesse, la cruauté du monde ! Mon Dieu, pitié, cachez-moi, je me tiens trop mal ! — Je

suis caché et je ne le suis pas.” 「わが身の弱や、この世の残酷ぞ。ああ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。」(Cf. Nuit de l'Enfer, p. 37) かかる叫びも自らにして発せられたのであり、彼岸の神ならぬ此岸の神に、往相即還相、還相即往相として「悪徳を背負」ったままで救済せられたのであり、innocence, douceur の世界において救済せられたのである。

しかしランボオにはかかる自己救済のほかには他者の救済、さらには先度他ともいふべき、菩薩行にも比すべき救済の思想が見られるのである。

Cf. Délires, I, p. 46.

Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour. Puis il faut que j'en aide d'autres: c'est mon devoir. Quoique ce ne soit guère ragôtant……, chère âme……

……何故って、俺はいつかは、遠い処に行っちまふんだからな。それに他の奴等だって助けてやらなくてはならない、それが俺の義務なんだ。たとひ、あんまりざつとしない仕事かも知れないが、……解ったな……

Cf. Nuit de l'Enfer, p. 33.

J'avais entrevu la conversion au bien et au bonheur, le salut. 俺は以前から、善と幸福への改宗を、救ひを、予見してはゐた。

やうに、同じく Délires, I, p. 48 にあける

Tu me feras mourir comme il a fait mourir cette femme.

C'est notre sort, à nous, cœurs charitables……

この男がこの女を殺してしまつたやうに、お前は俺を殺してしまふだらうよ。それが俺達の運命だ、俺達のやうな情深い人々の運命なのだ……

といふ、この言葉には、あたかも趙州が「お前は極楽へ行け、わしは地獄へ真逆様」といったのにも当る先度他の救済の思想が明かに見られるのである。

その他、Dévotion ぶ

…… Pour les naufragés.

…… Pour la fièvre des mères et des enfants.

…… Pour les hommes! — A madame\*\*\*.

A l'adolescent que je fus. A ce saint vieillard, ermitage ou mission.

A l'esprit des pauvres. Et à un très haut clergé.

……

…… 難破した人々の為に。

…… 母親達と子供達との発熱の為に。

…… 世の男達の為に。——××夫人へ。

…… 嘗ての俺の青春へ。隠遁乃至は伝道の、この年老いた聖者へ。

…… 貧しい人々の心へ。そして至徳の僧へ。

……

このやうにいつてゐるこれらの言葉はいづれもランボオの救済の思想を語るものひあふ。

なほ特こじつに注目せよ Comédie de la Soif, I じゃあうん。重要  
視すべきものと思はれるのよ。今、煩きことはちとの全文をおびてお  
う。

### 1. Les Parents.

Nous sommes tes Grands-Parents,

Les Grands !

Couverts des froides sueurs

De la lune et des verdure.

Nos vins secs avaient du cœur !

Au soleil sans imposture

Que faut-il à l'homme ? boire.

Moi, — Mourir aux fleuves barbares.

Nous sommes tes Grands-Parents

Des champs.

L'eau est au fond des osiers :

Vois le courant du fossé

Autour du château mouillé

Descendons en nos celliers ;

Après, le cidre et le lait.

Moi. — Aller où boivent les vaches.

Nous sommes tes Grands-Parents ;

Tiens, prends

Les liqueurs dans nos armoires ;

Le Thé, le Café, si rares,

Frémissent dans les bouilloires.

—— Vois les images, les fleurs.

Nous rentrons du cimetière.

Moi. — Ah ! tarir toutes les urnes !

一、親

俺達がお前の親なのだ、

お前の爺さん婆さんだ。

お月様と青草の

冷い汗にまみれてさ。

作った地酒にや脈がうつ。

陰日向のない陽を浴びて、

一人人間に何が要る、飲む事を。

俺——蛮地の河でくたばりたい。

俺達がお前の親なんだ、

この野原の御先祖様だ。

柳の奥には水が湧く、

湿ったお城を取巻いて、

見ろ、お堀の水の流れるのを。

俺達の酒倉に入って来い、

林檎酒シイドゥルもある、牛乳もある。

俺—飲むなら牝牛の飲むとこで。

生みの親なら遠慮はいらぬ。

さあ、飲んでくれ、

戸棚の酒はお好み次第、

なんならお茶か珈琲か、

飛切りのやつが湯沸かして鳴ってらあ。

——見たけりや絵もある花もある。

墓所は見納めとすることだ。

俺—いっそ「ああ」甕といふ甕が干したいものさ。

この詩に対しては他日別に註解を試みたいと思ふが今は一切を省かざるを得ない。ただ、この Parents には、正に親鸞を思はせるやうな、親鸞的至心廻向、弥陀の本願にも比すべき救済の思想が見られることを述べておきたい。Parents といふ語もかかる救済主としての意味をもつてゐるのである。しかしランボオの Parents はけっして彼岸の Parents だ

はなく此岸の Parents である。最後の “Ah ! tarir toutes les urnes” は前掲 *Nuit de l'Enfer*, p. 37 の *Mon Dieu, pitié, cachez-moi,……* に該当する言葉であり、一切自我をすてて Parents の救済に身を投じてうとする言葉と見てよいであらう。

このやうに考へてくると、たゞ *Nuit de l'Enfer*, p. 37 の

*Fiez-vous donc à moi, la foi soulage, guide, guérit. Tous,*

*venez,——même les petits enfants,—— que je vous console,*

*qu'on répanse pour vous son cœur,—— le cœur merveilleux !*

—— *Pauvres hommes, travailleurs ! Je ne demande pas de*

*prières ; avec votre confiance seulement je serai heureux.*

それでは、俺を信ずる事だ、信仰が、心を和げ、導き、癒すのだ。みんな来るがいい、——子供達も来るがいい、——俺は君達を慰めよう、君達の為に、人はその心を、靈妙な心を、ふり注ぐやうにしよう。——哀れな人々、労働者達。俺は祈りなどを望みはしない。君達の信頼さへあれば、俺は幸福になれるだらう。

この言葉も明かに同様の思想を語るものであらう。ここには祈りが否定せられてゐるのである。ただ信仰だけが求められてゐるのである。正しくこれがランボオの宗教であり、親鸞的至心廻向に比すべき救済の思想が語られてゐるのである。また *L'Impossible*, p. 70 の

—— *Mais je m'aperçois que mon esprit dort.*

*S'il était bien éveillé toujours à partir de ce moment, nous serions bientôt à la vérité, qui peut-être nous entoure avec des anges pleurant !……*

——だが、どうやら俺の精神は眠つてゐるやうな気がする。

俺の精神が、この瞬間から絶えずはつきりと目覚めてゐてくれるとしたら、俺達はやがて真理に行き著くかも知れぬ。真理は恐ろしく泣いてゐる天使達をつれて俺達を取巻くであらう……

とらつてゐる、この nous entoure avec ses anges pleurant にも同じ思想が語られてゐるものと考へることができるともあつた。

また Génie にかける

Et nous nous le rappelons et il voyage……Et si l'Adoration s'en va, sonne, sa promesse sonne :

そして、俺達は彼の事を思ひ出し、彼は旅する……若し『崇拜』が姿をかくせば、鳴るのだ、彼の約束が鳴るのだ。

とらつてゐる、この si l'Adoration s'en va, sonne, sa promesse sonne も明確に親鸞の至心廻向の思想を語つてゐるものとあつた。

だからひと fatalité du bonheur (Cf. Délires, II, p. 60.) とらつた、また O saisons, ô châteaux にかける

J'ai fait la magique étude

Du Bonheur, que nul n'élude.

かかる考へ方もできたとあつた。

Prêtres, professeurs, maîtres, vous vous trompez en me livrant à la justice: ——

この prêtres はキリスト教に關して、professeurs は知性に關して、maîtres は道徳に關して呼び出された語であらう。即ちランボオの世界においては、これらキリスト教、知性、道徳はすべても否定せられる。

きものであり、これらを超越した立場にあるので、キリスト教の立場から、知性の立場から、道徳の立場から今のランボオの世界を批判し裁かうとしても、それは誤りだ、もともとランボオはこれらの立場のいづれをも超えた立場にあり、je suis une brute であり、lois も解からず、sens moral も持た合せてゐない人間なので、いはば次元を異にしてゐるから、との意味であつた。

キリスト教に關しては、Cf. L'Impossible, p. 69.

——Mais n'y a-t-il pas un supplice réel en ce que, depuis cette déclaration de la science, le christianisme, l'homme se joue, se prouve les évidences, se gonfle du plaisir de répéter ces preuves, et ne vit que comme cela! Torture subtile, niaise; source de mes divagations spirituelles. La nature s'ennuyer, peut-être! Monsieur Prudhomme est né avec le Christ.

——然しながら、あの科学の宣言以来、基督教が、人間が、巫山戯ちらして、わかりきつた事を自ら証明し、それらの証明をくり返しては悦に入り、凡そこのやうにしか生きる術がないといふ処にこそ、まことの刑罰があるのではないか。手のこんだ、又馬鹿らしい責苦だ。俺の心があればこれと彷徨ひ歩いた所以だ。これでは自然も愛想をひかすことだらう。俗物紳士ブリュナム君は基督と一緒に生れなすつた。

同じく p. 70 参照。

Les gens d'Eglise disent: C'est compris. Mais vous voulez parler de l'Eden. Rien pour vous dans l'histoire des peuples

orientaux. — C'est vrai ; c'est à l'Eden que je songeais ! Qu'est-ce que c'est pour mon rêve, cette pureté des races antiques !

教会の人々は言ふだらう。解つてゐる。だが、あなたの言ふのはエデンの事だらう。東洋人達の歴史にはあなたの為になるものはない。——その通り。俺の夢みたものはエデンの園ぞ。一体俺の夢にとつて、古代民族のあの純潔が何を意味するのだ。

その他 Mauvais Sang, p. 16, p. 18, etc. 参照。なほ「人文」第四号、拙稿、「酩酊船私解」参照。

知性に関しては、同じく L'Impossible, p. 68 参照。

M'étant retrouvé deux sous de raison, — ça passe vite ! — je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré assez tôt que nous sommes à l'Occident. Les marais occidentaux !

鏗銭同然の分別が又戻つて来て、——何、ちよつとの間だ、——俺の数々の不安は、俺達は西洋にゐるのだと早く悟らなかつた事による、と俺は気が付く。西洋の沼々よ。

おまの同じく p. 70 参照。

Les philosophes : Le monde n'a pas d'âge. L'humanité se déplace, simplement. Vous êtes en Occident, mais libre d'habiter dans votre Orient, quelque ancien qu'il vous le faille, — et d'y habiter bien. Ne soyez pas un vaincu. Philosophes, vous êtes de votre Occident.

今度は哲学者だ。世界は若くも年寄りでもなく、年齢がないのだ。人類が単に場所を変へるだけだ。あなたは西洋にゐる、だが、あな

たがあなたの東洋に住むのは御自由だ、——どんなに古代であらうと自由だし、——また手際よく住むことだつて御自由だ。負けてはいけない。哲学者共よ、君等は君等で西洋種だ。

その他 Honte, Les Assis, Mauvais Sang, p. 17, Soleil et Chair, etc. 参照のこと。なほ知性に基く文化の否定などにもおよび枚挙に暇がない。道徳に関しては、Mauvais Sang のこのすぐ後のところぞ je ne comprends pas les lois ; je n'ai pas le sens moral, je suis une brute ; vous vous trompez vous tous. なほ Délirés, II, p. 60 や

l'action n'est pas la vie, mais une façon de gâcher quelque force, un énervement. La morale est la faiblesse de la cervelle. 行動は生活ではなくて、或種の力、或る神経の苛立しさを廉売する方法なのだ。「或る種の力の浪費だ、消耗だ。」道徳とは脳隨の弱さだ。といつてゐる。その他 Matinée d'Ivresse ; Jeunesse, III ; Justice ; etc. 参照。

Je n'ai jamais été de ce peuple-ci ; je n'ai jamais été chrétien ; je suis de la race qui chantait dans le supplice : —

ランボオの世界が ce peuple-ci, chrétien を否定して、これらを超越するための必要から、Je n'ai jamais été……といふのは当然のことであり、説明を要しない。

la race qui chantait dans le supplice et le Génie y  
le chant clair des malheurs nouveaux !

新しい不幸の清澄な歌声よ。  
といつてゐるやうな、「新しい不幸」の中から唄ひあげられる「清澄

な歌声」を發する race である。「新しい不幸」とは莫作の世界であり、不幸にゐて、ゐないところから清澄な歌声も出てくるのである。それは否定を媒介とする絶対肯定的還相行において發せられるものである。彼岸ならぬ此岸の惡にゐて惡にゐない、此岸の絶対肯定的イノサンスの立場において可能なのであり、いはば維摩の「淫怒痴即是解脱」であり、「不断煩惱得涅槃」である。正に Génie にやらず

l'orgueil plus bienveillant que les charités perdues.

失はれた数々の慈愛よりも、遙かに好意のある倨傲さだ。

とらふじとく l'orgueil plus bienveillant である。これが後でいふやうに“une brute”の世界でもあり、かかる race は race inférieure であるとともに真に race forte であるのである (Cf. Mauvais Sang, p. 18, p. 19.)。

そしてこの la race qui chantait dans le supplice とらふ言葉は直接的にはやぎの forçat intraitable に関連のある言葉であらうと思はれる。

またこの言葉を上記のじとく解すると、je n'ai jamais été chrétien といふ言葉には、chrétien が抽象的彼岸の世界に救ひを求めるものだと、ニユブンスがこめられてゐるものとも考へることができらるであらう。即ちかかる race は此岸の汚濁の中にゐて且つ清浄なる世界にすむものであり、不幸の中にゐて無畏の絶対安樂行を行ずるものといへよう。なほ chanter といふ語は、ランボオが自己の世界をしばしば音楽にたとへて語つてゐることに基く用語であらう。

Cf. Phrases.

en une maison musicale pour notre claire sympathie,

地獄の一季節註解

私達の朗かな交感にとつて、一つの音楽の家となる時に、  
Cf. Guerre.

C'est aussi simple qu'une phrase musicale.

音楽の一楽節の様に埒もない。「単純だ。」

Cf. Génie.

Son jour ! l'abolition de toutes souffrances sonores et mouvantes dans la musique plus intense.

彼の日。あらゆる苦悩は張り切った音楽の中に鳴り動き消えて行く。

je ne comprends pas les lois ; je n'ai pas le sens moral : —

上記道徳に関する条参照。

善悪道徳を超え、一切是の立場をいふわけである。それがつぎにいふ une brute の世界の一画でもある。

je suis une brute : vous vous trompez : —

une brute とは一切の人為の手の加はらない、はからひのない、うぶの世界である。それはこの箇所に即していへば、知性を超え、道徳を超え、真偽、善悪、さらには美醜すらも超え、一切の二元対立相対の世界を超えたところに生れる世界である。相対の世界に踟躕するかぎり生れ出やうもない世界である。一切の相対の世界の否定を媒介とする絶対否定即絶対肯定に生れ出る世界であり、自然法爾の世界である。だからランボオが félicité des bêtes を羨んだのである。

Cf. Délires, II, p. 55.

j'enviais la félicité des bêtes, — les chenilles, qui représentent

Innocence des limbes, les taupes, le sommeil de la virginité !  
 俺は獣物の至福を羨んだ、——冥府の無垢を表はしてゐる青虫を、  
 童貞の睡りを現はしてゐる土龍を羨んだ。

Mauvais Sang p. 19 の  
 je serai oisif et brutal.

あるいは同じく p. 20 の  
 Plutôt, se garder de la justice.——La vie dure, l'abrutissement  
 simple,……

brutal, abrutissement も同じ状態、同じ世界を指してゐるものと考へられる。そこに嬰孩行も出て、イノサンも出てくるのである。日本流にいへば木石心とでもいひ得ようか。  
 したがってかかる世界に住む人間を、キリスト教の立場から、知性の立場から、道徳の立場から裁かうとすることは間違ひだといひ得るわけである。

Oui, j'ai les yeux fermés à votre lumière. Je suis une bête,  
 un nègre. Mais je puis être sauvé. Vous êtes de faux négres,  
 vous maniaques, féroces, avares. Marchand, tu es nègre ; ma-  
 gistrat, tu es nègre ; général, tu es nègre ; empereur, vieille  
 démangeaison, tu es nègre : tu as bu d'une liqueur non taxée,  
 de la fabrique de Satan.——Ce peuple est inspiré par la fièvre  
 et le cancer. Infirmes et vieillards sont tellement respectables  
 qu'ils demandent à être bouillis.——Le plus malin est de quit-

ter ce continent, où la folie rôde pour pouvoir d'otages ces  
 misérables. J'entre au vrai royaume des enfants de Cham.

さうだとも、俺は貴様等の光には眼を閉ぢられてゐる。如何にも俺は獣物だ、黒坊だ。だが俺は救はれ得るのだ。貴様等こそいかさまの黒坊だ、偏執狂の、残忍な、貪欲な貴様等こそ。商人、貴様は黒坊だ。裁判官、貴様も黒坊だ。將軍、貴様も黒坊だ。皇帝、古臭い野望、貴様も黒坊だ。悪魔の醸造所から来た税金のかからない酒を喰らつたな。——この民族は熱病と癌とに靈気を吹込まれてゐる。廢疾者や老人共は、進んで釜茹カマダになりたいといふほど、見上げた方々だ。——ここで最も惻巧カキマカなやり方は「悪質なことは」、これらの惨めな人々を人質に取らうとして、狂気がうろつき廻つてゐるこの大陸を、離れることだ。俺はカムの子等の真正の王国に入る。

Oui, j'ai les yeux fermés à votre lumière. Je suis une bête,  
 un nègre. Mais je puis être sauvé:——

votre lumière は *あかり*、前を受む *し*、prêtres, professeurs, maîtres  
 の世界、即ちキリスト教、知性、道徳の世界をさすのであり、これらの光に眼を閉ぢすとは、これらの世界の否定をいふのである。これらの世界が彼岸の抽象的世界であるか、あるいは二元対立相対の世界であるかによるものである。それはある意味で人間否定である。Mauvais Sang,  
 p. 14 じゃ

J'ai horreur de tous les métiers. Maîtres et ouvriers, tous  
 paysans, ignobles. La main à plume vaut la main à charnue.



Là-bas, dans leur vaste chantier,  
Au soleil des Hespérides,  
Déjà s'agitent — en bras de chemise —  
Les Charpentiers.

Dans leurs Déserts de mousse, tranquilles,  
Ils préparent les lambris précieux  
Où la ville  
Peindra de faux cieux.

夏、朝の四時、  
愛の睡りはまださめぬ。  
木立の下には  
お祭の夜の臭ひが立ち昇る。

向ふの、広い仕事場で、  
エスペリイドの陽をうけて、  
もう大工達は、  
肌著一枚で働いてゐる。

苔むしたこの『沙漠』の中で、黙りこもって、

大工達は勿体ぶつた建築を、切り組んでゐる。  
都会はやがてその中に  
偽の空を描くだらう。

……………

と書いてゐるやうな意味での faux で、真実をおほひかくす意である。  
prêtres, professeurs, maîtres の世界は所詮は相対の世界であり、ラン  
ボオの世界、一元絶対の世界からすれば、それはいづれも真実をおほひ  
かくすものである。その意味での faux である。

faux nègres と書いてゐるのはどういふ意味であらうか。もちろん言  
葉としては「この前に je suis une bête, un nègre と書いてゐるが、この  
nègre をうけて書いてゐるのである。そこでこの nègre は race infé-  
rieure でもあった。この場合もその意味合をふくめてゐることはい  
ふまでもない。しかしそれだけではないことも確かである。 nègre は  
bête であり至福の世界のものであった、そこにこそ神が現成する世界で  
あった。この場合もその意味でいてゐるものと考へられる。即ちか  
かる prêtres, professeurs, maîtres は真実をおほひかくされた (faux)  
人間だが、根拠の世界としてはかかる人間も本来 bête としての nègre  
としての世界を持つてゐるのだ、本来 bête, nègre の世界を根拠として  
成立してゐるのだ、ただそれがおほひかくされてゐるに過ぎないのだ、  
といふ意味で faux nègres と書いてゐるのである。

Nuit de l'Enfer, p. 36 や

Veut-on des chants nègres, des danses de houris ? …… Veut-

on ? Je ferai de l'or, des remèdes.

黒奴の歌を歌って欲しいのか、美女の踊りを見たいのか。……お望みか。お望みなら黄金でも、霊薬でも作ってやらう。

と云つてゐる chants nègres は一元絶対の世界、神の世界からうたひあげられる歌をいふわけであり、だからこそそのうたが de l'or であり、煩惱苦惱を癒やす remèdes でもあり得るのだ。本来かかる世界を根拠として存立してゐながら、かかる根拠の世界を覚知することなく、chants nègres を忘れて、二元対立相対の世界、したがって自我の世界、したがって煩惱苦惱の世界に躊躇してゐるのが世俗 (le monde) の人間であり、professeurs であり maîtres であるわけだ。prêtres はかかる世俗からの解脱、救済を求めながら、いたづらに抽象的彼岸の世界に、その限りにおいて依然として相対の世界に遊ぶものだ、といふわけである。

L'Impossible, p. 68 や

Les marais occidentaux ! Non que je croie la lumière altérée,  
la forme exténuée, le mouvement égaré…… Bon ! voici que mon  
esprit veut absolument se charger de tous les développements  
cruels qu'a subis l'esprit depuis la fin de l'Orient…… Il en veut,  
mon esprit !

西洋の沼々よ。俺はその変性した光を、衰弱した形式を、錯乱した運動を信ずるのではないが……さうだ、今、俺の心は、東洋の終焉この方、人間精神が蒙つて来たありとある残酷な発展をあます処なく引き受けよう……俺の心がそれを欲するのだ。

といつてゐるやうに、かかる世俗の世界は、ランボオにとっては la lu-

mière altérée の *la forme exténuée* の *le mouvement égaré* であつた。だから j'ai les yeux fermés à votre lumière と云ふわけである。そこつかかる lumière, forme, mouvement の支配する世界の動きは développements cruels であるのである (たゞ L'Impossible のこの箇所は絶対肯定的にこれを受けようとしてゐるのであるか)。

かかる développements cruels にうき身をやつしてゐる点をさして vous, féroces と云ふのである。

そこつかかる cruel な世界の動きは、ランボオによれば、東洋の終焉この方 (depuis la fin de l'Orient) 始まつたのであり、そこに les marais occidentaux が現出したのである。それは西洋の知性、および知性に基く一切の文化の世界、一切の二元対立相対の世界を指していふのであるが、特に科学の世界をさしてゐるやうである。しかも知性、文化、科学に対する追求の態度にはあくことなきものがあつたのだが、そのあくことなき知性、文化、科学追求の態度をやつて vous, avarés と云ふのである。

Cf. Mauvais Sang, p. 16-p. 17.

Oh ! la science ! On a tout repris. Pour le corps et pour l'âme,  
— le viatique, — on a la médecine et la philosophie, — les  
remèdes de bonnes femmes et les chansons populaires arrangés.  
……

La science, la nouvelle noblesse ! Le progrès. Le monde mar-  
chel ! Pourquoi ne tournerait-il pas ?

さら、科学だ。人は全て飛び付いたのだ。肉体のためと靈魂のため

めに、——臨終の聖餐の秘蹟、——医学もあれば哲学もある、——万病に効く売薬とらまく並べた流行歌だ。……  
科学、新興の貴族。進歩だ。世界は進行する。何故逆戻りしないのだらうか。

Cf. L'Eclair, p. 75.

《Rien n'est vanité ; à la science, et en avant !》crie l'Éclésiaste moderne, c'est-à-dire *Tout le monde*.

「何一ひ空しいものはなう。科学く、進め。」と近代の『空想の書』が、とらふのはしまり誰も彼もが喚びつゝる。

Cf. L'Impossible, p. 69.

Tout cela est-il assez loin de la pensée de la sagesse de l'Orient, la patrie primitive ? Pourquoi un monde moderne, si de pareils poisons s'inventent !

何も彼もが、原始の国、東洋の思想と睿知とからは遠くにあるではないか。こんなに毒物ばかりが製造されて、何が近代だ。

かかる真実をおぼはれた世界における、真実をおぼはれた世界のみへの feroce な avare な追求の態度、それをやして vous, maniaques とらふのぢもらう。

Marchand, tu es négre ; magistrat tu es négre ; général, tu es négre ; empereur, vieille démangeaison, tu es négre : ——

このぢもらわられたる marchand, magistrat, général, empereur はぢづれも世俗のものとして否定せられるべきものであり、事実否定せら

れてみるものぢもら。

Cf. Chant de Guerre parisien ; Qu'est-ce pour nous ? ; Forgeron ; L'Impossible, p. 68 ; etc.

これらの中に直接にあるいは間接に、権力、正義の世界に属するものとして、憎悪の念をもちて対してゐるのが見られるのである。今、Qu'est-ce pour nous ? の中から数句だけをあげてみるから。

Et toute vengeance ? Rien ! ..... Mais si, toute encor,

Nous la voulons ! Industriels, princes, sénats :

Périssez ! puissance, justice, histoire : à bas !

Ça nous est dû. Le sang ! la flamme d'or !

.....

Ah ! passez,

Républiques de ce monde ! Des empereurs,

Des régiments, des colons, des peuples, assez !

復讐だつて下らない ! ..... —とは言ふものの

復讐は、俺らの望みとするところ ! 企業家、殿様、元老院、

滅びてしまへ ! 権力も、正義も、歴史もあるものか !

それがもとより当然だ。血だ、血を流せ、金の炎だ !

.....

行、ちまへ、

ああ、世界中の共和国 ! 皇帝陛下よ、

聯隊よ、阿呆大佐よ、民衆よ、もう沢山だ！

かかち marchand, magistrat, général, empereur に対し 'tu es nègre' といつてゐるのは如何なる意味であらうか。おぼろげに prêtres, professeurs, maîtres に対しては faux nègres といつてゐるのに対して、この場合はいづれも単に tu es nègre といつてゐるのである。そこに前者と後者とに対するランボオの対し方の相違が見られるやうである。

nègre は上記同様、一方 race inférieure としての意味をもち、他方しかしかかる race inférieure にこそ神が現成するのであり、ランボオの言葉を借りるならば、chants nègres をうたひ上げ得るものであり、その世界こそ「至福」の世界であつて、一切の存在の根拠の世界たる性格をもつものとしての意味を有してゐるのである。

したがつてこれら marchand, magistrat, général, empereur が nègre だとは、これらの人間はたしかに否定せられるべき人間だ、だがかかちる否定せられるべき人間であるこの連中も本来はやはり nègre なのだ (je suis une bête, un nègre といつてゐるものと同じ意味で)、神の世界を根拠として存在してゐる人間なのだ、との意味でいつてゐるのである。かかる考へ方は前にもふれたやうに、ランボオにおける、凡ゆる人間が誰しも逃れ得ぬ幸福の宿命をもつてゐるのだ、といふ思想に連るものである。

Cf. O Saisons, ô Châteaux.

J'ai fait la magique étude

Du Bonheur, que nul n'éluide.

(訳文前出)

地獄の一季節註解

Cf. Délires, II, p. 60.

je vis que tous les êtres ont une fatalité du bonheur :

(訳文前出)

といつてゐるやうに。

かくてキリスト教、知性、道徳の代表者としての prêtres, professeurs, maîtres に対するランボオの否定の態度、憎悪の念は、これら marchand, magistrat, général, empereur に対するよりは一層激しかったのではなからうかと考へられるのである。否定の態度としては変らなくとも、少くとも、これら後者にもつて race inférieure としての人間本来の姿がどこかに顔を出してゐるものと見てゐたやうに考へられるのである。

なほ vieille démanaison とするのは、あたかも同じく retraite, flamme といつても、ランボオの立場からすればなほ否定せられるべき retraite, flamme に対し 'vieilles retraites, vieilles flammes' といつてゐること (Cf. Barbare : — Loin des vieilles retraites et des vieilles flammes, qu'on entend, qu'on sent, — 人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隠遁や古めかしい情火とは、遙かに遠く離れて) 丁度同じ表現で、同じく démanaison といつても否定せられるべき démanaison であることを見ることが出来る。

tu as bu d'une liqueur non taxée, de la fabrique de Satan : —

これは特に empereur に対する言葉であるが、empereur が格別に強大な権力の座に居ることによるのであらう。d'une liqueur non taxée, de la fabrique de Satan とは如何なる意味であらうか。

Satan はもちろん神に対する反逆者、返逆への誘引者であり、したがって汚濁の世界への誘引者である。しかしランボオの場合は同じく神といつてもキリスト教における神とはちがひ、汚濁即清浄、清浄即汚濁、相対即絶対、絶対即相対、としての此岸の神であった。一時一時の相対的な一事一事に行ぜられ現成すべき性質の神であった。したがってランボオにおける Satan はかかる神に対する反逆、返逆への誘引者として Satan, Démon とらいつてもさるのである。したがって普通の場合の意味を異にしてくる場合があるのである。

Cf. Une Saison en Enfer, p. 8.

《Tu resteras hyène, etc……》 se récrie le démon qui me couronna de si aimables pavots. 《Gagne la mort avec tous tes appétits, et ton égoïsme et tous les péchés capitaux》

Ah ! j'en ai trop pris : — Mais, cher Satan, je vous en conjure, une prune moins irritée ! ……

「お前はやっぱり鬻狗か、そんなもんなさ……」と悪魔が反対する。悪魔は昔いかにも可憐な罌粟の花で、俺に冠をかぶせてくれたのだ。「死ぬがよい。あらゆるお前の慾情や、お前の利己心や、七つの大罪一切を身に著けたまま。」

ああ、俺は著け過ぎるほど身に著けたのだ。「ああ、俺は死なんか食ひ過ぎて了った。」——ところで、親愛なる大魔王、お願ひだ、そんな苛々した眼付をしないでくれ。

(既述当該箇所参照)

またランボオには、*delires, désordre* のやうに、世俗の立場から見れ

ば、それは *delires* であり *désordre* であるが、それこそ真理への道を辿るものである、といふやうな語の使ひ方が見られるのであるが、Satan や Démon の場合にも同様の使ひ方が見られる。たとへば *Delires*, I, p. 43 で *vierge folle* が *l'époux infernal* をやして

*Le Démon ! — C'est un Démon, vous savez, ce n'est pas un homme.*

『悪魔』ですとも。——あなた様も御存知です、それは悪魔です、人間ではありません。

とらいつてもさる例である。

この場合はランボオの神に対する返逆、返逆への誘引者としての意味に使つてゐるのである。empereur が否定せられるべきものであることに對して、かひかかぬ empereur も本来は上記の意味での *negre* であり、*chants nègres* をうたひ上げることのできるはずの人間であるのに、かくも否定せられるべき人間となつたのは Satan の誘引によるものだ、との意味でいつてもさるのである。non taxée といふのは絶大なる権力者としての empereur であることに基く言葉で、別に他意はないのであらう。したがつてここには *marchand, magistrat, général* に対すると同様に憐憫、慈悲のニュアンスがふくまれてゐるものと考へてよいと思ふ。だからこそ次ぎに *Ce peuple est inspiré par la fièvre et le cancer* といふ言葉が出てくるのである。

*Ce peuple est inspiré par la fièvre et le cancer : —*

この言葉は上記のやうに、むしろ憐憫、慈悲のニュアンスをもつていふ言葉であらう。fièvre のため cancer のために世俗のとりこになり終



pour pouvoir dotages ces misérables : —

この continent は *marais occidentaux* と *le plus malin* (「最も  
 精巧なやり方」ではない。やはり「最もよくないこと」の意味である。) としてあることは否定の否定としての有化還相、救済の思想を語るものである。あたかも *Bateau ivre* が非情の大河を下って大陸を離れ、舵も錨もなく海の只中にただよひ、透脱の境地に達して後再び *ヨーロッパ*、*fache noire et froide* をのぞみ、そこに還相行、菩薩行を行じようとしたのと同じである。

自らこの continent にあり、自ら地獄に墮さるることによって、この continent の救済を行じようとするわけである。またどこにこそ抽象化されない、観念化されない最も具体的な真理の世界があるわけである。此岸即涅槃である。かくてこそ、この汚濁の continent を汚濁の故に捨て去らうとすることは、ランボオにとっては最もよくないことであり、抽象的観念の世界に遊ぶものとしてとりぞけられるわけである。

Cf. *Mauvais Sang*, p. 25, p. 26.

Vais-je être enlevé comme un enfant, pour jouer au paradis  
 dans l'oubli de tout le malheur ? ..... Adieu chimères, idéals,  
 erreurs !

..... Vous me choisissez parmi les naufragés ; ceux qui  
 restent sont-ils pas mes amis ?

Sauvez-les !

俺は、あらゆる不幸を忘れて天国に戯れて遊ぶ為に、小児のやう

に攫はれてしまふだらうか。……………妄想よ、理想よ、〔観念よ〕  
 過失よ、おさらばだ。

……………貴方は、(神よ) 難破した人々の中から俺を選んで下  
 った。が、取り残された人々も、俺の友達ではないのか。  
 彼等を救ひ給へ。

Cf. *L'Impossible*, p. 68.

*Les marais occidentaux* ! Non que je croie la lumière altérée,  
 la forme exténuée, le mouvement égaré…… Bon ! voici que mon  
 esprit veut absolument se charger de tous les développements  
 cruels qu'a subis l'esprit depuis la fin de l'Orient…… Il en  
 veut, mon esprit !

西洋の沼々よ。俺はその変性した光を、衰弱した形式を、錯乱し  
 た運動を信ずるのではないが……さうだ、今、俺の心は、東洋の終  
 焉この方、人間精神が蒙って来たありとある残虐な発展をあます処  
 なく引き受けよう……俺の心がそれを欲するのだ。

J'entre au vrai royaume des enfants de Cham : —

Cham はノアの第二子、黒人諸宗族の先祖 (ランボオ全集第三巻、八十  
 四頁参照)。

上記のやうに、彼岸ならぬ此岸が即涅槃、相対即絶対、絶対即相対と  
 して、一時一時の相対的な一事一事に神の現成を行ずる世界がランボオ  
 の世界であり、したがってこの汚濁の continent を去ることなく、自ら  
 この continent の只中において、神の現成を行じ、救済を行じようとする  
 のである。それはキリスト教の神ならぬ神であり、次ぎにいふ Nature

の世界でもあつたわけだ。それは Je suis une bête, un nègre といふやうに nègre の世界でもあつたわけだ。かくて J'entre au vrai royaume des enfans de Cham といふわけでもあつた。キリスト教に対する Adieu の言葉と見てよむべきであらう。

Connais-je encore la nature ? me connais-je ? — Plus de mots. J'ensevelis les morts dans mon ventre. Cris, tambour, danse, danse, danse, danse ! Je ne vois même pas l'heure où, les blancs débarquant, je tomberai au néant.

Faim, soif, cris, danse, danse, danse, danse !

俺はまだ自然といふものを知つてゐるだらうか。自分を俺は知つてゐるか。——最早言葉は無用だ。俺は死んだものを腹の中に葬る。叫び、太鼓、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス。白人どもが上陸して、俺は虚無〔無〕のまじ唯中に墜ちて行くだらうが、何時の事か、俺には一向解らない。

飢え、渇き、叫び、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス。

Connais-je encore la nature ? me connais-je ? : —

ランボオにおける Nature は、自然科学的物質的自然でもなければ、主体をふくめての一切の有の世界の直接肯定的な自然でもない。ランボオの世界は、有無、主客の二元対立相対の世界の否定を媒介として、絶対否定即絶対肯定として有の世界が肯定せられるところに Nature が出てきたのである。かかる Nature は聖なる世界であり、また神の世界で

もあつたのである。有即無であり無即有であり、汚濁の世界が即清浄の世界であつたのである。汚濁の世界が即神の現成としての意味を担つてゐるのである。かくて一時一時の一事一事が即永遠であり、絶対であり、神の現成であつたのである。そこに一切の煩惱苦悩からの解脱が可能であつたのであり、かかる世界の覚知に基く他者の救済の思想も出てきたのである。

かくて Les Soeurs de Charité にかへり

II porte à la nature en fleur son front saignant.

血の滲む額の額を花咲く自然へと差向けるのだ。

といふほど苦悩にみちた front saignant が向けられる Nature である(尤も Les Soeurs de Charité においてはまだ死の世界に Sœur de Charité を求めつゝゐるのだが)。

また L'Impossible, p. 69 や

Mais n'y a-t-il pas un supplice réel en ce que, depuis cette déclaration de la science, le christianisme, l'homme se joue, se prouve les évidences, se gonfle du plaisir de répéter ces preuves, et ne vit que comme cela ! Torture subtile, niaise ; source de mes divagations spirituelles. La nature pourrait s'ennuyer, peut-être ! Monsieur Prudhomme est né avec le Christ.

然しながら、あの科学の宣言以来、基督教が、人間が、巫山戯ちらしめて、わかりきつた事を自ら証明し、それらの証明をくり返しては悦に入り、凡そこのやうにしか生きる術がないといふ処にこそ、まことの刑罰があるのではないか。手のこんだ、又馬鹿らしい責苦だ。俺の

心があればこれと彷徨ひ歩いた所以だ。これでは自然も愛想をつかすことだらう。俗物紳士ブリュナム君は基督と一緒に生れなすった。と云つてゐるやうに science, christianisme の世界、知性および知性に基く一切の文化の世界、および彼岸の彼方の神に救を求める抽象の世界に対しては愛想をつかす Nature である。Nature は知性を超えた、抽象的ならぬ此岸の具体的世界であるからである。

また Fêtes de la Patience, I, Bannières de Mai や

Qu'on patiente et qu'on s'ennuie

C'est trop simple. Fi de mes peines.

Je veux que l'été dramatique

Me lie à son char de fortune.

Que par toi beaucoup, ô Nature,

— Ah moins seul et moins nul! — je meure.

.....

Je veux bien que les saisons m'usent.

A toi, Nature, je me rends ;

Et ma faim et toute ma soif.

Et, s'il te plaît, nourris, abreuve.

.....

やれ忍耐だの退屈だのと、

芸もない話ぢゃないか!.....チェツ、苦勞とよ。「こんな苦勞は馬鹿馬鹿しい。」

鹿馬鹿しい。」

ドラマチックな夏こそは

『運』の車にこの俺を、縛ってくれるでこそよろし、

自然よ、おまへの手にかかり、

——ちつとはましに賑やかに、死にたいものだ!

.....

季節々々がこの俺を使ひ減らしてくれればいい。

自然よ、此の身はおまへに返す、

こんな渴きも空腹ヒモシヤも。

お気に召したら、食はせろよ、飲ませろよ。

.....

と云つてゐる。この詩は特にランボオの Nature を直接的には最もよく語つてゐるものともいへよう。

ランボオにおいては一切の否定行の彼方に寂靜の bleu blanc の死の世界が出てきた。そしてそこに ennui が出てきたのであった。この往相面が還相面に轉換せられるところに、ennui は姿を消して Nature の任運の世界が出てきたのである (Je veux que l'été dramatique/Me lie à son char de fortune.)。Nature の世界は単なる空なる寂靜の世界ではなくて、相即的にこれをふまへつつ、此岸の世界に具体的なる姿をもつて生々流転してやまない世界であり、その流転のままに流転して行く世界である、任運の世界である。その流転の一步一步が有であることもに即無であり、絶対であり、神である。だから Je veux que les saisons m'usent とはいはれ得るのである。“O Saisons, ô Châteaux”の一篇はかかる境涯を語る典型的な詩といへよう。Age d'Or においても

O ! joli château !

Que ta vie est claire !  
De quel Age es-tu,  
Nature princière

De notre grand frère ? etc……

美しや！ 城の影！

お前の生命は輝けり！

ああ、いつくしき大自然

我が大いなる兄弟よ

お前の齢はいくばくぞ？ e t c……

とうたつてゐる。眼にふれ耳にふれる一切の世界がそのまま即絶対であり、永遠であり、神である。それがランボオの Nature である。だから一時一時の一事一事に Le Devoir s'exhale であり、しかも前後際断なるが故に Sans qu'on dise : Enfin であり、したがって永遠はその都度その都度に retrouver されるものである (Cf. Fêtes de la Patience, 3. L'Eternité)。ランボオの Nature は、具体的に感覚に即した、前後際断的行為の世界である。けつして抽象的観念の世界ではない。

しかもそれは絶対的主体に対する対象としての世界ではない、如何なる意味においても対象化することを許さない世界であり、したがって、如何なる対象に対する、如何なる欲求追求の心もない無一物の世界である。Nature は無一物の世界であり、無求の世界である (A toi, Nature, je me rends ; / Et ma faim et toute ma soif)。

且つ絶対否定即絶対肯定として、具体的なる感覚の世界に身をおき、有の世界にあるもの故に Le monde est vicieux (Cf. Age d'Or.) であ

ることはまぬがれない。しかし否定を媒介とするもので直接肯定ではない故に、かかる Le monde vicieux 汚濁の世界が即清浄なる神の世界であった。悪にみて悪にみない世界であった。ランボオの Nature はかかる「莫作」の世界であった。だから Et ma faim et toute ma soif といったその直後において Et, s'il te plaît, nourris, abreuve といはれた得たのである。

かかる Nature の世界において一切の煩惱苦悩からの解脱が可能であり、かつかかる Nature は、いはば悉有仏性で一切の人間に本来生得の世界なる故に、かかる Nature の覚知において一切の人間を救済し得るものである。したがってかかる世界は聖なる世界であるとともに Mauvais Sang, p. 26 や

Je vois que la nature n'est qu'un spectacle de bonté. Adieu chimères, idéals, erreurs !

自然は善心に溢れた見世物に過ぎない、「自然は慈愛の展覧に外ならぬ」と俺には見えるのだ。妄想よ、理想よ、「観念よ、」過失よ、おさらばだ。

といてゐるやうに bonté (慈愛) の世界であり、amour の世界である。しかも抽象的観念の世界ではなく、此の身の、此の一時の、この一事、この一行為に現成する具体的世界である。故に、Adieu chimères, idéals, erreurs ! といふわけである。

かかる Nature は、一切の二元対立相対の世界を、したがって自他の対立を超えた世界であった。しかも抽象的観念の世界ではなく、どこまでも自他対立相対の世界を媒介としてのみ現成する世界であった。した

がって自は白であつて、しかも即他者であり、他者は他者であつて、しかも即自である世界である。かくて Nature を覚知することは同時に自己を覚知することである。me connais-je? といふ所以である。

おまに J'entre au vrai royaume des enfans de Cham といつてゐるが、この vrai royaume des enfans de Cham が Nature の世界をさすわけであり、今、この王国に入るに際して、ここに反省の言葉として Connais-je encore la nature? me connais-je? が発せられたものとして考へてよいであらう。ところがかかる Nature の世界は分別悟性の立場を超え、言語を超えた世界であり、語を以てしては語り得ぬ世界であるとともに、また言語を以て語ることを無用とする世界でもある。一歩一歩に行ずるのみであるから。かくて Plus de mots といふ所以である。

Cf. Mauvrais Sang, p. 17.

C'est très certain, c'est oracle, ce que je dis. Je comprends, et ne sachant m'expliquer sans paroles paiennes, je voudrais me taire.

俺の言葉は神託だ、それは極めて確実だ。俺には解つてゐる、ただ解らせようにも異教徒の言葉しか知らないのだから、俺は黙つてゐたいのだ。

Cf. O Saisons, ô Châteaux.

Que comprendre à ma parole?

Il fait qu'elle fuie et vole!

私が何を言つてゐるのかつて、

言葉なんぞはふう飛んじまへだ!

J'ensevelis les morts dans mon ventre : —

これはいふまでもなく死の否定、即ち絶対否定即絶対肯定としての還相行を語るものである。それは有の世界への否定的轉換である。イノセンスが現成する世界である。これに該当する思想は至るところで語られてゐる。その還相面における姿を現はすのが次ぎの言葉である。

Cris, tambour, danse, danse, danse, danse! : —

そこに現出してくるのは有の世界の喧騒であり、他愛もない世の動きである。そこにこそ神が現成するわけである。抽象的でない此岸における感覚に即した具体的世界であるから生々流転して止まない世界である。かかる有化還相を語る Vies, III において

Dans une magnifique demeure cernée par l'Orient entier j'ai accompli mon immense œuvre et passé mon illustre retraite. J'ai brassé mon sang. Mon devoir m'est remis. Il ne faut même plus songer à cela. Je suis réellement d'outre-tombe, et pas de commissions.

俺は東洋全土で囲まれた壮麗な住居で、自分の大業を完成して、赫々とした隠遁を過した。俺は、俺の血液を攪拌した。再び、務めはこの手に戻つた。これに就いては、夢みる事すら許されぬ。本當に墓場の向ふから来たこの俺だ、何の用事があるものか。

このやうに、かかる世界を illustre retraite (vieilles retraites に対して) としつて、 J'ai brassé mon sang といふ。

Je ne vois même pas l'heure où, les blancs départquant, je tomberai au néant : —



俺は凡ての神秘を發アブかり、宗教の神秘を、自然の神秘を、死を、出生を、未來を、過去を、世界の創成を、虚無「無」を。俺は幻術の道士だ。

ランボオがここでいふ *mystères* は結局、最も具体的なる真実なる世界、神の世界をさしてゐる。 *mort, naissance*……以下並べられた語の最後に *néant* がおかれてをり、かつ *mort* とは別個におかれてゐる。そしてなほその後で *Je suis maître en fantasmagorie* といつてゐる、これらの点から、*néant* が、ランボオが窮極至りつくべき境地としての絶対無の世界をさしてゐるものと考へてよい様に思はれるのである。

Cf. *Vies*, I.

*Exilé* ici j'ai eu une scène où jouer les chefs-d'œuvre dramatiques de toutes les littératures. Je vous indiquerais les riches ses inouïes. J'observe l'histoire des trésors que vous trouvatés. Je vois la suite! *Ma sagesse est aussi dédaignée que le chaos. Qu'est mon néant, auprès de la stupeur qui vous attend?*

ここに流竄の身となつて、俺はあらゆる文学の演劇的傑作が演ずる一幕をわがものとした。君達に未聞の富をみせようか。俺は、君達の見付け出した宝物の歴史を観察する。すると次に来るものが見える。混沌をさげすむやうに、俺の睿知をさげすむのだ。君達を待つ昏睡に比へては、俺の虚無「無」とはそもそも何か。

ここでいふ *Exilé* は無化往相の世界から *exilier* されることをいってをり、したがって有化還相行を語つてゐるのである。その有化還相行は前述のやうに、前後際断的に一步一步に神の現成を行ずる世界であつた。

したがつて外見上そこには何等の統一もないかのごとくに見え、あたかも「混沌をさげすむやうに、俺の睿知をさげすむ」といふことになる次第である。その有化還相行をさして *mon néant* といつてゐるのであるから、虚無であらうわけはない、その一步一步の行為が絶対無の象徴たる意味を担ふことをさして *néant* といつてゐるのである。

かくてランボオにおける *néant* はいづれも死の世界、虚無の世界をさしてゐるのではなくて、有化還相行の絶対無の象徴たる意味合を担つてゐるものであることが考へられるのである。

かかる絶対無の現成するであらうことが「何時の事か、俺には一向解からぬ」(*Je ne vois même pas l'heure où……*)とは正にどの通りで、かかる行為的現成は、如何なる意味においても、意識の対象となることがないからである。対象に化するかぎりにおいて、相対に墮することをまぬがれないからである。“*Vies*” III にある *Il ne faut même plus songer à cela* と *Il n'y a plus d'ailleurs* “*L'Eternité*” にある *Il ne faut même pas songer à cela*、*Braises de satin*、*Le Devoir s'exhale* / *Sans qu'on dise: enfin.* といふ所以である。能楽の世阿弥が「智外の非」をいふとともに、「智外の非の用心すらなき」ことをいつてゐるとその軌を一つにするものといへよう。また仏教においても「仏性」とは「無仏性」といはざるを得なかつたのも、同じところに理由があるので、仏性「有り」といふことすら言ふを許さぬところに、真に仏現成するのである。それと同じやうにかかる *néant* の現成するところは、正に *Je ne vois même pas* といはれるところなのである。

*Faim, soif, cris, danse, danse, danse, danse!* :—

Faim および soif は否定せられるべきものであり、また事実否定せられたものであった。

Cf. “Fêtes de la Faim” et “Le Loup criait sous les Feuilles.”

今は引用を省略するが、右の二篇は欲求の否定、無求、無一物の世界をうたった典型的な詩であり、ランボオの詩のうち最も魅力ある詩である。

否定せられる所以は faim, soif の存するところ、直に、二元対立相対の世界、したがって自我の世界、かくて煩惱苦悩の世界に墮するからである。その faim, soif がこの有化還相行において絶対肯定せられるわけである。それは faim や soif に居て居ない莫作の世界であるから

である。

Cf. Bannières de Mai.

A toi, Nature, je me rends ;

Et ma faim et toute ma soif.

Et, s'il te plaît, nourris, abreuve.

自然よ、此の身はおまへに返す、

こんな渇きも空腹ヒモシツクも。

お気に召したら、食はせろよ、飲ませろよ。

cris, danse, danse, danse, danse ! についでに上記参照のこと。

〔未完〕